



Sunrise Ministry  
アンカー

# Anchor

イエスは間もなく来られる

戦争 災害 迷まん

日曜休業令  
荒らす憎むべきもの  
マタイ24の15  
ダニエル12の11

身を起し頭をもたげなさい  
あなたがたの救いが近づいているのだから

ダニエル マタイ 黙示録



サンライズ ミニストリー 刊行誌  
2008年 6月

40号

ああ、恵み、我にさえ及べり

神様の学校—権利の放棄 パートII

オットー・コーニング

デジタル社会の再臨信仰

マザー・テレサ40年間の信仰の危機

法王ベネディクト16世の宣言

# デジタル社会の再臨信仰

デジタルとアナログという言葉が良く聞かれるこの頃です。アナログというのは、右A図のことで、過去、現在、未来の全体が見られる。全体の中で現在の位置はどこにあるかを知ることができます。デジタルというのは、その時、瞬時しか見えません。

現代はデジタル時代とも言われています。現代人はあまりにも情報過剰で、毎日、その日、その時のニュースに追いついていくだけでも忙しく、過去を顧みることもない、未来のことも考えないで生き、起こる激変、異常にもその瞬時は驚くが喉もと過ぎればケロッとしています。

次のような童謡を思い出します：

1.今は山中 今は浜  
今は鉄橋渡るぞと  
思うまもなくトンネルの  
闇を通して広野原

2.遠くに見える 村の屋根  
近くに見える町の軒  
森や林や田や畑  
後へ後へと飛んでゆく

3.回り灯籠の 絵のように  
変わる景色の面白さ  
〇見とれてそれと知らぬ間に  
〇早くも過ぎる 幾十里



我々はアナログ的に歴史を顧みる必要があるのではないのでしょうか。

我々は今、時の流れのどこにいるのか、人類歴史の終末のどこまで来ているのかを知る必要があります。「彼らが滅びたのは、おとずれの時を知らなかったからである」と言われる(ルカ 19:44)。「空のこうのとりの時を知り、山ばとと、つばめと、つるはその来る時を守る。しかしわが民は主のおきてを知らない」(エレミヤ 8:7)。神の民は「主のおきて」、時に従って事をなさる神の法則を知らないということでしょう。

エゼキエルは「『日は延び、すべての幻はむなしくなった』という、このことわざはなんであるか」(12:22)と言いましたが、まさに我々の教会の状態を預言したと思います。再臨の日の遅延にともない、幻、すなわち預言の霊は空しいと軽視する傾向がアドベンチスト焦燥を生んでいるのです。しかし、「主なる神はこう言われる、『わたしはこのことわざをやめさせ、彼らが再びイスラエルで、これをことわざとしないようにする』と。しかし、あなたは彼らに言え、『日とすべての幻の実現とは近づいた』」(エゼ 12:23)。

今日ほど預言の霊、証の書を必要とする時代があるのでしょうか。様々な混乱と困惑、襲いかかる危機から我々を救うために与えられたと私は心から信じます。この預言の賜物は主の再臨に備えるために与えられました。「幻=証の書」の言っていることが実現する時は近づいています。

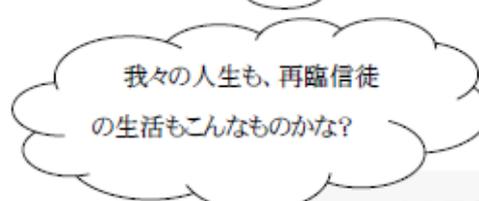
再臨の日が近づいていることは何をもって知ることができるのでしょうか？

いったん日曜休業令が發布されると、「サタンの驚くべき働きがやってきたこと、また、世の終りが近いことを知る」(5T451)。また、「神の働かれる時が来たことを知りなさい」(7BC980)と主の僕は言われました。その「定められた終りの時」に「実現する」預言の研究は、最後の民を大いなる叫びへと準備させるでしょう。ダニエル書—黙示録の新鮮な研究の詳細は追って研究していきたいと思えます。

もうすぐ新年(2008年)を迎えることとなりますが、預言された「産みの苦しみ=陣痛」はすでに始まっていますので、もうすぐ「さあ、花婿だ、迎えに出なさい」という合図の叫びがなされるでしょう。最後のテスト=生ける者の裁きは、神の民にとっては、再臨と同じほどすばらしい「よきおとずれ」であると聖書は言っています。

ノーベル平和賞を受賞した国連の「気候変動に関する政府間パネル(IPCC)」のラジェンドラ・パチャウリ議長は18日のNHKのインタビューで地球温暖化現象の危機に直面して、最も怖いのは、「無知」だと言っていました。「わたしの民は知識がないために滅ぼされる」(ホセア 4:6)。

花婿を待ち焦がれる信徒の皆様、お互いに「主とその恵みの言」の研究に邁進いたしましょう。



# ああ、恵み、我にさえ及べり

～再臨信徒としての私の天路歷程～

金城重博

## キリストの再臨 ダニエル 2 章の預言の研究

私が中学 3 年の時であった。わき目もふらず受験勉強に専念していた。隣の家で聖書研究が持たれており、肺結核をわずらって静養していた姉に「あんたの友だちがみんな聖書研究に行っているよ、行ってみたら」と勧められた。宗教など縁遠いものと思っていたが、友達がいるなら行って見ようとの思いで顔を出してみた。なんと肺結核で肋骨 6 本もとられた婦人が聖書研究を授けていた。それがまたダニエル書 2 章の預言の研究であった。過去の人類歴史は、聖書の預言通りに動いてきた。これから世界はどうなるかも預言されている。この世界は学校で習うように進化発展していくのではなく、もう終わりに来ている。キリストが再臨なさる時が近づいていると説いていた。



私は感動した。高校生、中学生数人の者が安息日を守り始めたため問題となり、毎放課後、職員室に呼び出されたり、新聞にも「社会秩序のびん乱者セブンスデー・アドベンチスト教会」と書き立てられたりもした。しかし、私は聖書に魅せられて、小さい時から野口英世にあこがれて医者になりたい希望を持っていたが、それを捨てて三育学院へ行く決心をした。田舎の両親は反対もせず許してくれ、東京にいたクリスチャンでもない姉が犠牲を払って月謝を出してくれた。

三育学院高校在学中、幻を失いそうになった時もあった。理想と現実の中で葛藤した。かろうじてカレッジに行くことになり、神学部を卒業した。甥が中学校を卒業するというので、ぜひ最後の再臨運動の器となってほしいと思い、三育学院高校に入学することを勧めた。その頃は私も牧師インターンをしていたので、自分が助けられたように人を助けたいと思い、月謝を援助した。しばらく勉強して彼は、おじさんに世話になるよりは自分で自分の道を開くと言って学院を中退し、コック見習いをしながら独学していった。

私は三育学院を卒業後、しばらく沖縄で牧会についたが、数年後に医事伝道を学ぶためにアメリカに行く。そこで、カレッジ オブ メディカル エバンジェリスト(College of Medical Evangelist=今のロマリンダ大学)の福音医事伝道者としての最初の卒業生であった、J.H.N.チンデル先生に出会い、勧められて、ロマリンダで公衆衛生の勉強をした。

## キリストの再臨はほんとうにあるの？

ロサンゼルスで働いている頃、SDA に導きたいと思った三育中退の甥が我々を訪ねてやってきた。フランス料理店を開きたいという。数年後には、独立してパサデナというところに店を構えた。大成功。やがてサンタモニカにも支店を持つ。そしてロサンゼルス郡のベスト10に数えられるにいたった。



彼は何回か私に言う：「オジサンたちは、世の終わりが来る、キリストの再臨がもうすぐ来ると、ずっと前から言っているが、世界はますます逆の方に動いているではないか」と。私は、聖書の預言は確実に成就しているとは言うものの、キリスト再臨の遅延について正直なところはっきり答えることができなかった。そして彼に教会に行くことを強く勧めることもできなかった。

惜しみなく我々を助け、数年生活を共にしたある信徒がいよいよ老齢になり、病の床でポツンとつぶやいた：「キリストの再臨は、本当にあるのですかね」と。熱心に教会活動に参加して下さったのに再臨の遅延に疲れ果てたのであろう。

私の友人が最近、世の終末を告げる諸事件に触れ「再臨の前に我々は完全な品性になっていなければならないというのが君の主張だよね。教会の情けない状態はいつまで続くのだろうか？」というような手紙をくれた。

## いつキリストは再臨なさるのだろうか？

確かに聖書と証の書には、我々の品性が完成するとキリストは再臨なさると書いてある。全世界への伝道が終わったら世の終りが来るとも言っている。そのために教会は、不信仰と不服従を戒め、品性完成、伝道完成のために信者を叱咤激励してきた。しかし、リバイバルと改革が叫ばれるたびに教会の背信は深まっていった。

聖書によると、教会が準備ができたらいエスは再臨なさるというのは確かである：

「また、しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、清くて傷のない栄光の姿の教会を、ご自分に迎えるためである」(エペソ 5:27)。

証の書も同じことを言っている：

「キリストは、ご自分の教会の中に、ご自身をあらわそうと熱望しておられる。キリストの品性が完全にキリストの民の中に再現されたときに、彼らをご自分のところに迎えるために、主はこられるのである」(実物教訓 47)。

また伝道に関しても、全世界に福音が宣べ伝えられたら終りが来るというのも聖書の言っていることである。

「そしてこの御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである」(マタイ 24:14)。

これは、はっきりしていることである。

## 「キリストの再臨近し」の使命はいづこに？

だから、熱心に主の再臨を待ち望む民は、一生懸命福音伝道にいそしんできた。そうこうしているうちに、時はますます延びるかのように見える。熱心な再臨説教者が一人去り、二人去りしていった。そ

れでも多くの伝道者が後に続き「末世之福音」を掲げて、先駆者の精神を引き継ぎ、どこに寝ようと何を食べようとかまわず、自己犠牲と自己否定のうちに、熱心に「キリストの再臨近し」と伝道していった。戦中、戦後の弾圧やあらゆる困難を乗り越えて伝道したとき、第七日目安息日再臨教団は祝福されていた。ちなみに日本伝道の最初の趣旨を見てみよう：

「セブンスデー・アドベンチストが日本国においてその働きを開始する 37 年前、....（プロテスタント）諸教会はすでに伝道を開始して、それぞれ熱心な活動を繰り広げて、キリスト教に対する理解を深めていた時である。

しかし、セブンスデー・アドベンチスト教会はそれらの諸教派に加えてもう一つの別の教派を増すために、宣教活動を行うのではなく、聖書全巻の基調であるキリストの十字架の血による罪の清めと再臨による救いの成就に関して主が予告なさった『そしてこの御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである』（マタイ 24:14）、また主がお命じになった『そして彼らに言われた、「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。信じてバプテスマを受ける者は救われる。しかし、不信仰の者は罪に定められる』（マルコ 16:15、16) を、黙示録に象徴された『神の戒めを守り、イエスのあかし(預言の霊)を持つ』（黙示録 12:17) 残りの子らとして、中空を飛んで『あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音』（黙示録 14:6) を大声で叫ぶ三天使の使命、すなわち天の審判が完了し、イエス・キリストは、あがないの務めの座を立ち上がり、栄光の王として『すぐに来る』（黙示録 22:20) と主を迎える準備を促すことを本旨とするものである』「使命に燃えて」梶山積 12, 13。

1954 年、三育学院に私が高校生としていったころからしばらくの間は、盛んに「キリストの再臨近し」との説教者の叫びが聞かれた。1962 年 25 才で三育学院を卒業した私は、牧師の卵として石川教会に送られた。学院時代は大いに伝道心に燃やされていた。この教会に、教団にすべてを捧げようと決心していた。教会に、組織に、指導者に信頼して。

ところがその頃から、学生時代の熱心さは現実の伝道の場に適用されないことを経験した。伝道の困難さに悩んだ。

## 聖所の覚醒メッセージ

数年して不思議な現象に直面した。「聖所の覚醒メッセージ」というものに出くわす。それが、教会内に大きな波紋を起こす。アメリカ、オーストラリアにおいて教会を揺さぶった異端が沖縄に入ってきたという噂を聞いた。沖縄メディカル・センターの信頼されている医者がそれに汚染されたというのである。この医者は軍からの信用も非常に厚かった。世界総会から指導者が数人送られてきて、しばらくして本国に返された。

沖縄にとって大きな損失となることを知った教役者は、その理由を問いただした。教団は問題沈静のために指導者を送ること数回。この時私ともう一人の先輩が別々にその医者から資料をもらって、異端とされている点を知りたいと思い研究していた。ところが指導者のこの点が異端だと言っていることは、



ブルンズミード兄弟本人たちがそうは言っていないことをもって「異端」呼ばわりしているのである。全く最後の真の教会と信じていた教会が、このような事の処し方をするのを見せられてがっかりした。事の真相を追究しようと聖書と証の書をこれほどくまなく探し読んだことはなかった。

セブンスデー・アドベンチストの再臨信仰の基礎であり、中心的な柱である「聖所は清められて正しい状態に復する」(ダニエル 8:14)の意味が分かってきた。なぜ、セブンスデー・アドベンチストは生まれたか、存在しているのか、この教会は、単なるキリスト教派の一教派ではなく、特別な目的のために生まれたのだということが分かった。

「我々の働きと使命は三天使の使命である」(6T384、2SM 142)。「我々の働きは、再臨の栄光の前に立ち得るように人々を備えることである」(9T98、大争闘下 140)。

なぜ、イエスが天の聖所から至聖所に移られたかという理由がはっきりしてきた。キリスト教派が何百とある中で、なぜわざわざ再臨運動を誕生



させたかその理由が分かってきた。なぜ、人間は創造されたかということも、キリストとサタンの大争闘のモチーフ(認識、考え方)から分かってきた。特になぜ、この残りの教会がラオデキヤ状態に陥ったかということもはっきり分かってきた。三天使の使命、調査審判が永遠の福音であることも分かってきた。間違いを探そうとする態度で始めたので覚醒されるのに長い時間がかかった。やっとイエスが今どこで何をしておられるか、自分と何の関わりがあるかを見出したとき、私の心はエマオへの途上の弟子たちと同じく「心が内に燃えたではないか」といった経験をしたのであった。

キリストの再臨が遅れているのは、我々の教会の準備ができていないからであり、伝道の完成もすべてこれにかかっていることは耳にたこができるほど何回も聞かされてきた。確かに福音は国々に広まっている。しかし、教会は1888年以來、ますます深刻なラオデキヤ状態に陥ったことを知った。神学部においても教会の真の歴史を知らされてこなかった。教会は昔のイスラエルと全く同じ道をたどっていることを知った。教会、指導者、組織に頼って、我らの義—キリストに頼っていない自分を見出した。神意は指導者からのみ来るものと思いついてきたことの愚かしさを知った。

「サタンはいつも、神の代わりに人間に注意を向けさせようと努力している。彼は、人々が自分で聖書を探って自分の義務を学ばないで、監督や牧師や神学者を案内者とするように導く。そうする時に、サタンはこれらの指導者たちの心を支配することによって、大衆を意のままに感化することができるのである」大争闘下 361。

これには驚いた。1888年のメッセージが拒まれたのもそこに原因があった。ユダヤ人が亡びたのも指導者に自分たちの魂をまかせたことに原因があった。

「これらイエスの反対者たちは、人々が子供の時から尊敬するように教えられ、彼らの権威には絶対に従うように習慣づけられていた、その者たちであった。人々は、『なぜわれわれの役人たちや学者たちはイエスを信じないのだろうか。もしこの人がキリストであるなら、こうした敬虔な人たち

がこの人を受け入れないことがあろうか』と問うた。ユダヤ民族に彼らの贖い主を拒否させたのは、このような教師たちの影響であった」 同上。

神が光の器を送られるとき、一人の人が全部の光を持っていると期待してはならないと預言者は言っている。また、その人が語る事が異端であると自分で分かるまでは、決して異端呼ばわりしてはならない。もし、私が指導者の判断にのみ任せていたら、決して現代の真理、至聖所でとりなしておられるイエスを見出すことはできなかつたであろう。

「もしナタナエルがラビの指導を信頼していたら、彼は決してイエスをみいださなかつたであろう。彼は自分で見、自分で判断して、弟子となった。今日偏見にとらわれて恵みから遠ざかっている多くの人々の場合も同じである。もし彼らがきて見さえしたら、その結果はどんなに異なったものになるだろう。人間の権威による指導にたよっているかぎり、だれも救いの知識である真理に到達することができない。…」1 希望 159-161。

「アドベンチスト焦燥」の原因も分かった。背信の理由も分かった。ピアソン世界総理は、教会の現状を次の聖句を引用して嘆いた。

「民はヨシュアの在世中も、またヨシュアのあとに生き残った長老たち、すなわち主がかつてイスラエルのために行われたすべての大いなるわざを見た人々の在世中も主に仕えた。こうして主のしもべヌンの子ヨシュアは百十歳で死んだ。... そしてその時代の者もまたことごとくその先祖たちのもとにあつめられた。その後ほかの時代が起つたが、これは主を知らず、また主がイスラエルのために行われたわざをも知らなかつた」 士師 2:7-10。

確かに今は「主を知らず、また主がイスラエルのために行われたわざをも知らない」時代が起こっているのである。

## 忘れてはならない 1888 年のエピソード

「聖所の覚醒メッセージ」とウィーランドとショート共著の「1888 年再吟味」を読んで、初めて 1888 年のエピソードを知った。SDA の歴史を学んでみると、どうして今までこれらのことについて何も聞かされなかつたのか不思議でならなかつた。荒野をさ迷うラオデキヤ教会を神は放って置かれなかつた。神はラオデキヤ教会を癒そうとくすしくも介入なさつたのだった。

1888 年、あの有名なミネアポリス世界総会の時に、二人のメッセンジャーをお立てになつて、教会に大覚醒をもたらそうとされた。

「信仰による義認」という「人間の唇から聞いた初めての明瞭な教え」を与えられた(MS 5、1889)。

それは後の雨による大いなる叫びをもたらす使命であつた。「第三天使の使命は、信仰による義認そのもの」であつた。このエピソードは、古代イスラエルがカデシ・バルネアで経験したことにとえられる。12 人のスパイのうち 2 人、ヨシュアとカレブが信仰によってすぐカナンに入ろうと勧めたが、イスラエルは彼らの使命を拒み、不信仰と不服従を表し、また荒野をさまよう事になつた。



A. T. ジョーンズ



E. J. ワゴナー

**1890年**：「私はミネアポリスの集会の時以来、かつてないほどのラオデキヤ教会の状態を見せられた」RH8-26, 1890。

なぜ、1891年世界総会はホワイト夫人をオーストラリアに送ったか？ メッセンジャー二人とその使命を支持したからである。

**1895**：「なぜそんなにジョーンズ兄弟とワゴナー兄弟を憎むのか... あなたがたがこれらの人々の伝えたメッセージを拒む時、そのメッセージを与えられたキリストを拒んでいるのです」手紙 51-A, 1895。

**1896**：「指導者の強情心が... 反抗させた。聖霊の特別な力を締め出してしまった。... 世界中を栄光で照らす光は拒まれ、我々の兄弟たちの行動によって締め出された」1 SM234, 235。

**1902**：「ミネアポリスの世界総会での恐るべき経験は、現代の真理を信じるものの歴史の中で最も悲しい章の一つであることが示された」Letter 179, 11-19, 1902。

「私の生涯中最も悲しい経験」 (The Ellen G. White 1888 Materials, 179) と記されている。

A.T.ジョーンズ:

**1893**：「では、兄弟たちは、ミネアポリスで何を拒んだのでしょうか？ (会衆の応答) 「大いなる叫びです」... 「それでは、彼らが立っていた恐ろしい立場にいた兄弟たちはミネアポリスで何を拒んだのでしょうか？ (会衆の応答) 「彼らは後の雨、すなわち第三天の使命の大いなる叫びを拒んだのです」世界総会研究 7。

A.G.ダニエルス(元世界総理 25年間) :

**1926**：「そのメッセージは、決して受け止められなかったし、宣べ伝えられることもなかった。また、その中に含まれていた計り知れない祝福が何の妨げもなく伝えられるということはなかった」Christ our Righteousness, p41, (1941版)(1926初版)(キリスト我らの義)。

二人を支持した E.G.ホワイトはオーストラリアに神の支持によらずに送られ、ジョーンズとワゴナーはついに沈黙させられ、残念ながらその後背教していった。

ある人は、プリンズミード兄弟は背教したから彼の教えは異端であったと言う。ジョーンズとワゴナーも背教した。故に彼らの教えは異端であったと言えるだろうか。ソロモンも背教した。だから箴言、伝道の書、雅歌書は靈感を受けていないと言えるだろうか。

## 聖所の清めは、聖徒の罪の除去、完全にして永遠の清め

私は、天の聖所の清めと言っても、罪の除去は天の聖所にある記録の書から罪が除去されることだとしか聞かされていなかったが、実は「聖所の清め」とは、聖徒たちの経験であるとはじめて知った。天の記録は、地上の神の生ける宮である我々の心の記録の写しであって、我々の罪の記録が除去されないで天の記録が除去されるはずがないとの教えに論理的な「聖所の清め」の福音を知った。天でなされるイエスの働きと地上の神の宮でなされる聖霊の働きの調和を説いたのがプリンズミード兄弟であった。我が教会が天の働きのみ強調して、聖霊による我々の内なる体験をおろそかにするということが、「聖所の清め」を無味乾燥な教理にしてきたことに気づかされた。

## 救いの公式

しかし、ある人は、内なる清め—我々の体験を強調するあまり、中世時代のカトリック神学の体験主義、あるいは自分中心の主観的聖霊運動に傾く危険に陥った。聖書は客観的に、自分の外になされるイエスの働きと、自分の内になされる聖霊の働きを教えている。さらにプリズミードは、その優先順位が重要であることを強調した。救いの公式は、簡単にまとめると次のようになる：

- |  |
|--|
| No.1 <u>わたしの為</u> に成してくださった、また成してくださる <u>キリストの働き</u> |
| No.2 <u>わたしの内</u> に成してくださる <u>聖霊の働き</u>              |

この公式をひっくり返すと、クリスチャン生活は律法主義に陥り、空しい形式と化し、結果的に救いを失ってしまう。ペンテコステ、聖霊運動は、No.2を強調して自分の内に目を向けるようにさせる。完全を求めるあまりに、いつまでたっても自分の欠点に悩まされ、鬱に陥ってしまう。No.1に目を向けて、イエスを凝視すると確かに自分の欠点、罪がますます見えてくるが、キリストの純潔を渴望し、「自分にはできないが、神にはできないことはない」、確信は自分の内に求めるのではなく、キリストとそのみ言葉に求めるのである。「主われを愛す、主は強ければ、我弱くとも恐れはあらず」という全世界で歌われているこの子供賛美歌の意味がどんなに深い神学的な思想を表しているかが分かった。

まさにこれこそ「信仰による義認」である。

## 信仰による義認

「信仰による義認」神学のチャンピオンであるパウロは、アブラハムに言及して次のように言った：

「彼はこの神、すなわち、死人を生かし、無から有を呼び出される神を信じたのである。彼は望み得ないのに、なおも望みつつ信じた。... すなわち、およそ百歳となって、彼自身のからだは死んだ状態であり、また、サラの胎が不妊であることを認めながらも、なお彼の信仰は弱らなかった。彼は、神の約束を不信仰のゆえに疑うようなことはせず、かえって信仰によって強められ、栄光を神に帰し、神はその約束されたことを、また成就することができると確信した。だから、彼は義と認められたのである」ローマ 4:24。

さばきの時に、罪が除去されて完全になった人は、決して自分の内になされた聖霊による完全を主張しない。「私は無(0%)、キリストがすべて(100%)の体験である。1888年のメッセージは何であったかという、まさにその体験をもたらす使命であった。

そんなことが分かって、いわゆる「完全主義」から私は救われた。キリストにある完全を説くとすぐ「完全主義」だと反論する人があるが、それは論外である。ほんとうの福音は、「神がその約束されたことを、また成就することができるという確信」である。自分が何ができるかではなく、神が何をなさるかを見るのである。まさに「人にはできないが、神にはできないことはない」「主は強ければ、我弱くとも恐れはあらず」である。自分にはできないから、神にもできないと言うのは信仰による義認ではない。

そのことを知って、自分でなく、主に目を向けてからの喜びは、1844年の再臨信徒が大失望の後、イエスを至聖所に見出して「喜びと確信と希望」を見出したのと同じものであった。「キリスト・イエスにあっては、割礼があってもなくても、問題ではない。尊いのは、愛によって働く信仰だけである」(ガラテヤ 5:6)。英語では、「Faith which works by love」と言う。ここで愛によって信仰は働き、行い、業となって表されるというもう一つの救いの法則を知る。E.G.ホワイトは、「良い行いによって救われるのでは

ないが、良い行いがなければ救われない」(AG 309)と言われた。

三天使の使命は「信仰による義認そのものである」という意味も分かってきた。信仰による義認が最も系統的に教えられているところはローマ書3-8章である。キリストに来る者に①無償で与えられる義、②自我に死ぬ、③服従という三つの経験がパックで与えられる。これが三天使の使命の本質である。「神の義は...信仰から信仰に至らせる」、信仰による義認で始まり、信仰による義認で終わる。「着せられる義(義認)によって正しい品性を完成する」(青年への使命 15)という理解は、裁きが福音(よきおとずれ)であることを確信させ、わたしの心に深い喜びを与えた。

## 調査審判は永遠の福音である

調査審判が福音であるという意味は、裁判官がイエスであると同時に弁護士もイエスであるという事だ(ヨハネ 5:22、27)。有能な弁護士であるイエスが無罪を宣告するために、我々を裁いてくださるのである。

それに、審判は、「婚姻」(結婚式)と聖書に教えられている(マタイ 22、25)。大争闘下 141-145、実物教訓 287にも書かれている。雅歌書では花婿キリストと花嫁教会との美しいロマンスが預言的に描写されている。パウロも2コリント 5:2に「あなたがたを、きよいおとめとして、ただひとり男子キリストにささげるために、婚約させたのである」と言っている。そして至聖所における「最後のあがない」を英語では「final at-one-ment」と言う。すなわち、最後の結合、一つとなること、一体となることなのである。「神性と人性の結合」(実物教訓 217)。「こうして新しい契約が完全に成就する」(大争闘下 217)。



調査審判をこんな風に考えるようになって、心は躍るような思いになった。信仰によって義とされたのだから、どうして完全にならなければならないか、信仰によって救われているのだからどうして品性の完成を求める必要があるのかとある人は言う。結婚を待つ恋人同士が婚約だけで満足するだろうか。イエスは「わたしのおるところにあなた方もおらせるために」「場所を用意しに行く」と約束された。結婚を済ませて早くわたしたちと一緒に住みになりたいのである。いつ花嫁は花婿イエスを迎える準備ができるのであろうか。「小羊の婚姻の時がきて、花嫁はその用意をしたからである」。調査審判はなんとすばらしい福音であろうか(黙示録 14:6)。

## いつ生ける者のさばき？

神の民が完全な品性の祝福に預かるのは、「生ける者のさばき」で成就することを知った。そして生ける者のさばきは、日曜休業令が發布されてから始まることが分かった。生ける者のさばきにいつ移るか誰も知らないと言えられていた自分にとってそれは福音であった。

「間もなく—その時がいつかはだれも知らないが—生きている人々の番になる。神のおそるべき御前で、われわれの生涯が調査されねばならない」大争闘下 224。

上記の引用文は、英文から次のように訳されるべきことを発見した。

「間もなく—その時がどれほど速やかに (how soon) 来るかは誰も知らないが—生きている人々の番になる」

それは、二つの危険から自分を救った。

- ① ある人はすでにさばかれて、主から捨てられているのではないかという調査審判を恐れる誤った考え。
- ② 日曜休業令から生ける者の裁きが始まるのであれば、罪に今勝利しなくても、生ける者のさばきで瞬間的に除去されるから、それまでのんびり待てばいいという考え。



聖所の覚醒メッセージは、私に多くの謎を解いてくれた。後の雨を求めようというリバイバル運動がなぜ機能しなかったのか、教会で一時的な興奮からかえって背信へと後退する現象が見られたのはなぜであろうか。教会は日曜休業令という最後のテストによって震われてから罪の除去がなされて、後の雨が注がれるのである。

セブンスデー・アドベンチスト改革派の誤りからも救われた。144,000の生ける神の印は、1844年以後三天使の使命を信じて与えられるのではなく、日曜休業令のテストの後に来る品性完成であるということも分かった。神の印を受けるということは、単に安息日を守るのではなく、内なる恵みの業が魂のうちに完成されたしるしなのである。品性が完成された者に後の雨が降るのではない。後の雨は単に世界伝道に力を添えるだけではない。生ける者の裁きに来て、罪が除去され後の雨が注がれて魂の内に神の道徳的品性を完成するのである(TM506)。



「神がご自分の子らに望まれる理想は、人間の最高の思いが達することができるよりもっと高い。.... クリスマン品性の理想は、キリストに似ることである」 2 希望 20。

この理想が「贖罪の犠牲と全能の仲保」の働きによって可能になるというのである。

「私どものあがないのために払われた価、私どものためにそのひとり子に死をさえおゆるしになった天の神の測り知れない犠牲を考えると、キリストによって私どもは非常に高潔な状態に到達することができるという観念をおこさずにはおられません」 キリストへの道 10, 11。

残りの民へのこれらの祝福は、「自分たちの罪深さと弱さと無価値さを完全に知って、さばきの座には

ばかりことなく出頭する者たちに最後の仲保の祝福として与えられるものである」(国と指導者下 193-196)。だからさばきは恐怖ではなく良きおとずれ、福音なのである。罪のゆるし、清め、完全という神の祝福を頂く条件は、「神に対する悔い改めとイエスに対する信仰」(大争闘下 217)である。完全になってさばきに出頭するという考えが調査審判を怖いものにしていたのである。そして審判は、この「最後のあがない」「特別なあがない」「特別な清め」を、「聖徒たちのために」(ダニエル 7:18,22,27)用意してくれるものであることを見逃していた。ただ調査されることだけが説かれていたために恐怖感を持つ信者が多くなったのであろう。自分もそうであった。その調査に合格し、最終的に神の前に出られるようになるため一生懸命清められなければならないと思っていた。ある神学者は、自分は完全主義に陥っていたと告白し、今では「新神学」を説いて日本でも指導者たちを酔わせてしまった。

## 婚姻の時

この婚姻の時はいつだろうか。日曜休業令が立って生ける者のさばきの時から始まるというのである。

日曜休業令が始まると確かに迫害が始まる。しかし、教会が清められないと、迫害は来ないのである。カインがアベルを殺したのは、アベルの清い生活の故であった。ユダヤ人がイエスを憎み殺そうと図ったのは、イエスの清い生涯の故であった。結婚式において花嫁なる教会は、生ける神の印を受ける。そして「永遠に安全」で「聖なる者」とされるのである(国下 193-196)。

「ところで、今日の教会が注意すべきもう一つのさらに重大な問題がある。使徒パウロは、『キリスト・イエスにあって信心深く生きようとする者は、みな、迫害を受ける』と言っている(テモテ第二・3:12)。それでは、迫害の火が消えているように思われるのは、なぜであろうか。その唯一の理由は、教会が世俗の標準に妥協したために、反対を引き起こさないということにある。今日、世に迎えられている宗教は、キリストとその弟子たちの時代の信仰のように純潔で聖なるものではない。キリスト教が世の中から迎えられているように見えるのは、罪と妥協する精神、神のみ言葉の偉大な真理に対する無関心、教会内における生きた敬神の念の欠乏のゆえにほかならない。初代教会の信仰と力が復興するならば、迫害の精神もまた復興し、迫害の火は再び点じられるのである」 大争闘上 42, 43。

日曜休業令から迫害(小さな悩み)が始まるのであるが、「愛には恐れがない」(1ヨハネ 4:18)。雅歌書 8:6、7に美しい表現がある：「わたしをあなたの心に置いて印のようにし、あなたの腕に置いて印のようにしてください。愛は死のように強く、ねたみは墓のように残酷だからです。そのきらめきは火のきらめき、最もはげしい炎です。愛は大水も消すことができない、洪水もおぼれさせることができない。もし人がその家の財産をことごとく与えて、愛に換えようとするならば、いたくいやしめられるでしょう」。

## 預言の霊=証の書の権威 (我が教会内において)

完全論、キリスト論、終末論、生ける者の裁き、罪の除去、後の雨、神の印、大いなる叫び、教会の権威とクリスチャンの自由等々と様々な神学論争の中で、人間の詭弁でなく、イエスの証=預言の霊がどんなに問題を単純化し、調和のとれた実際的な案内書であるかに感動は止まなかった。確信はいよいよ強まった。天路歷程の道中、一つ一つの問題が起こるたび



ごとに神学者でなく、教会会議でなく、多数決でなく、聖書記者と同じ靈感を受けた現代の預言者、E.G. ホワイトに導きを乞うことが出来るのは特権ではないだろうか。

聖書翻訳、新共同訳聖書問題に関しても、私に正しい判断を与えたのは証の書であった。セレブレーション礼拝形式、音楽の問題もそうである。SDA のカトリック観、他教派観も変わって来た。信者が動揺するのも当然である。「カトリックは変わった、今は信教の自由を認めている」「他教派をバビロン呼ばわりしないで仲間として協力すべき」とか先輩牧師たちに教えられてきたことと違ったことを言うから、信者は生ける水にあえいでいるのである。聖霊はあらゆる真理に導くという約束がある。終末になればなるほど、証の書は安全な道案内なのに、19 世紀にアメリカで書かれた預言者的指導者の著書、一参考書などと聞かされ、信者は、不確かな神学の「濁った水」を飲まされて健康を損なっているのである。私に最も深い感銘を与えた「各時代の争闘」は時代遅れの古臭い本と評されているという。

人間の議論は、水掛け論である。学者の意見には二つ以上の迷わせる意見が存在するものである。我が教会には、預言の霊=証の書があるために、キリストとサタンの大争闘という宇宙的観点から物事を捉えることができ、終末のさまざまな教理の風、混乱から守られることを感謝したい。

## 近年のさらなる預言の理解

年を追うごとにさまざまな事件が起きるが「喉もと過ぎれば熱さ忘れる」で、わが教会は終末観から程遠くなり、警告使命はますます語られなくなる。教会では警告は脅しであって、福音とされていない。「平和だ無事だ」のムードが漂う。預言の研究や教理の研究で人は救われるのではないと思込まされ、安価な恵み、セレブレーション礼拝が一般諸教会から流れ込んできている。ダニエル書と黙示録がよりよく理解されるとき、「信徒は全く異なった宗教経験を持つようになる」(牧師への勧告 114)、「大リバイバルが来る」(同 113)、「改革がもたらされる」(同 118)と預言者が言っているにもかかわらず、なぜか、再臨運動を誕生させた預言の研究はあまりなされない。

そんな時、マリアン・ベリーの雅歌書の預言的研究、ダニエル書 12 章の未来適用という新しい光が来た。このセミナーは、私にとって大きな励ましとなった。少々花婿が来るのが遅かるうが、失望せず待てるようになった。教会の状態に、指導者に、自分に失望はしない。

ところで、「花婿が来る」というのはいつのことだろうか。再臨のことではなく結婚式、すなわち調査審判に来ることなのだ(大争闘下 142)。調査審判=結婚式、婚姻であるという考え方からもそれは、福音であるとたやすく考えられる。「さあ、花婿だ、迎えに出なさい」という声はいつ聞かれるだろうか？日曜休業令から、婚姻=生ける者の調査審判が始まるなら、日曜休業令がその合図であろう。

花婿に早く会いたい気持ちが高まってくると、その足音がさやかに聞こえてくるのではないか。イエスがマタイ 24 章に世の終りのしるしを与えられた。

2001 年 9 月 11 日に米国で発生した世界貿易センター爆破事件は実に恐るべき事件であった。それ以後あちらこちらで続発するテロ事件、そして 2004 年 8 月にフロリダ半島を襲った巨大ハリケーン・カタリーナ、2004 年 12 月に発生したインド洋津波は世界の人々を震撼させた。それらは、我々を危機感に目覚めさせよとする警告のしるしであり、終末が非常に近づいている事を知らせる神のみ告げでなくてはならないであろう。

今年春、Dr. ファウラーを通してまたすばらしい光が与えられた。

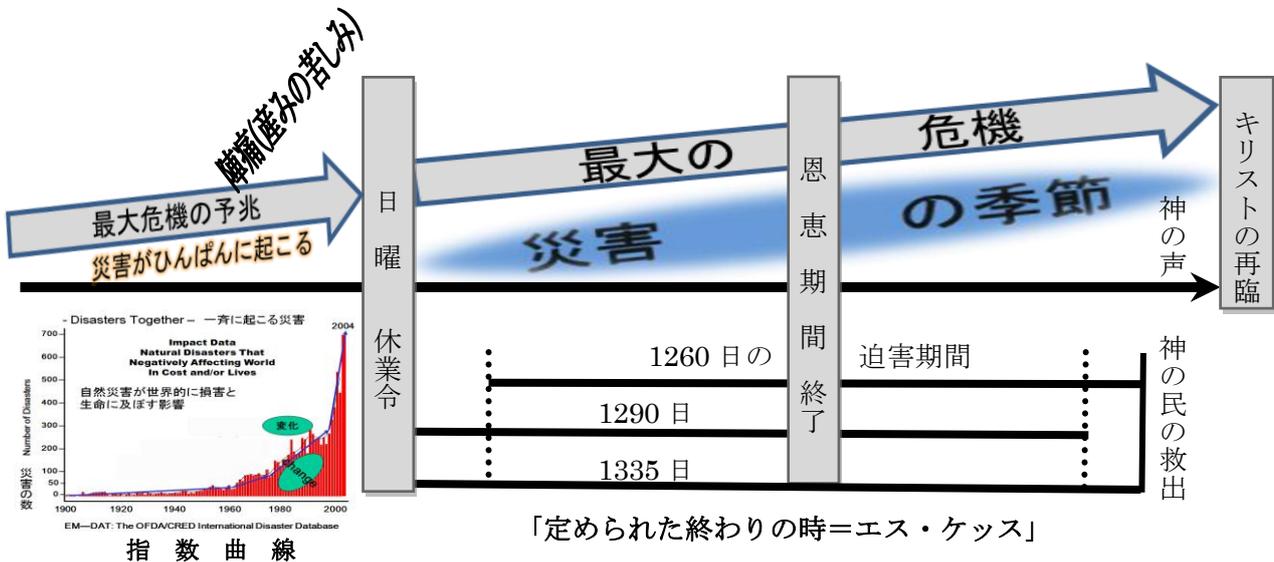
彼の研究は、マタイ 24 章とダニエル 8 章～12 章を結び合わせた詳細な提示である。12 章の未来適用はベリーから学んでいた。それがダニエル 8 章～12 章は終りの時、ヘブル語で「エス・ケッツ=終局の終り」の預言だというのである。

マタイ 24:34 「よく聞いておきなさい。これらの事が、ことごとく起るまでは、この時代(世代)は滅びることがない」

こうしたことがいったん起こり始めると、一世代のうちにすべて起こるということである(34 節)。一世代とは、40 年と推測される。

1. 流浪の 40 年間に起こった世代 (あ下 1、5、6; 詩篇 95:10; 使徒 13:18  
ヘブル 3:15 - 17; 民 32:13)
2. バビロン捕囚 エレミヤの 40 年間警告「ユダ王国最後の 40 年間に改革とリバイバルの使命を伝えた」SB(旧)987 (エレミヤ 29:10、歴代下 21)
3. エルサレム滅亡  
イエスがこの使命を与えられたのは紀元 30 年、それから 40 年後の紀元 70 年にエルサレム滅亡。

以前に下記のチャートを紹介した。



今までの研究に、ファウラーは真ん中の横線の下部分を加えた。指数曲線に表されている「産みの苦しみ=陣痛」はやがて未曾有の事件が始まることを示唆していると言う。産みの苦しみ=陣痛が始まると終りが非常に近いことが分かる。しかも、陣痛はもう 1980 年頃から始まっているというのである。地震、洪水、津波、山火事、ききん、疫病、爆破事件等々の惨事が続発している。これらの災害も個々には昔から起こっていた。それは終末のしるしとならない。それらが一緒に一塊となって起こる時にしるしとなるというのである。

実際我々は、神の民の永遠の運命を決定する日曜休業令に導く上記の前兆が、益々ひんぱんに起きているのを見ている。日曜休業令が發布されると、字義通り 1260 日、1290 日、1335 日の期間があり、その後神の民の永遠の救出がある。天からの神の声で初めて、キリストの再臨の日時が発表される(大争闘下 418)。

この期間のことが「定められた終りの時=エス・ケッツ」と呼ばれている(ダニエル 8:17、19;11:27、28、35、40;12:4、9、13)。この期間に起こる預言、幻をヘブル語で“ハーゾーン”といい、2300 日/年と 70 週(490 年)の預言はヘブル語で“マレー”と言う。“ハーゾーン”は、終りの約 3 年半の期間に関する事で、終りが近づく時に解読され、それまで封印されることになっていた。そして今、それがしきりに研究され、解読されつつあることは、これもいよいよ最後の時代に来ている証拠である。

この短期間に何が起こるといえるのであろうか。

- ① 「聖所が清められて、正しい状態に復す」こと、すなわち聖徒の罪が全く除去されて、完全にキリストの品性が再現されるのである。
- ② キリストとサタンの大争闘のクライマックスの諸事件。「小さい角」「一人の王」「北の王」、すなわちローマ法王教の最後の暴挙を預言は描写している(ダニエル 8:9-13;11:29-45;12:7)。かつてないほどの神の民の迫害である。

①の栄光の姿の教会が出現すると②の大迫害が起こることになる。この地上において「最後の戦い」が展開される。

1844 年以後、清められた栄光の姿の教会はいまだに出現していない。むしろ墮落し背信していく教会にどれほど多くの再臨信徒が失望していることだろうか。1888 年に与えられた「人間の唇から聞いたことのない尊いメッセージ」もそのような教会を出現させることはできなかった。1960 年代の「聖所の覚醒メッセージ」も同じである。小羊キリストの花嫁が主を迎える備えをするのは、1844 年以降ではあるが、いつという明確な解答は、ダニエル 12 章になされているのである。

「ダニエル書と黙示録は一つのものである。一つは預言であり、他は啓示である」(S B 新 580)とされているが、よく観察すると、ダニエル書も黙示録も調査審判(生ける者の裁き)においてはじめて聖所が清められる、つまり、聖なる集団(144,000)が出現することがよくわかった。黙示録はダニエル書を補足するものであるとも言われている。それから「最後の戦い」が短期間ではあるが、展開されることが分かった。

ダニエル書：生ける者のさばきが来て→聖所の清め、回復がある(ダニエル 7:17、22、27)

「東と北からの知らせ=神の印/大いなる叫び」→最後の戦いが展開される(11:40～12:13)。

黙示録：生ける者のさばきが来て(5 章)→白い馬が出現する(6 章)、144,000(7 章)

日曜休業令=獣の刻印の強制(13 章)→(14 章の)144,000、完全に純潔な民の出現。

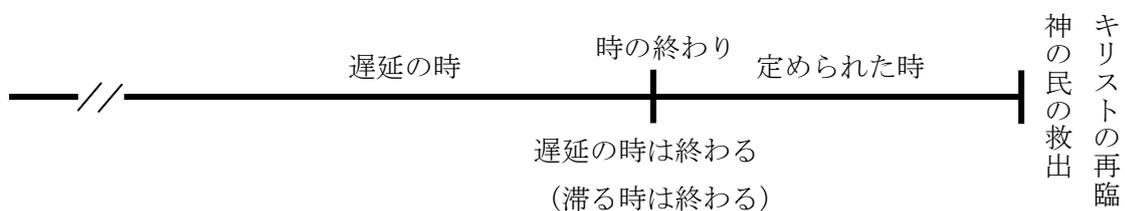
## もう滞りはしない

「主はわたしに答えて言われた、『この幻を書き、これを板の上に明らかにし、走りながら、これを読みうるようにせよ。この幻はなお定められた時を待ち、終わりをさして急いでいる〔終わりに語るであろう—欽定訳〕。それは偽りではない。もしおそれれば待っておれ。それは必ず臨む。滞りはしない(遅れることはない)・・・』ハバクク 2:2-3。

ああ何という啓示だろう！ 神との新しい契約の完全な成就がもうすぐだ。

もうしばらくすれば荒野の放浪は終わるのだ。「もう時がない」「もはや時が延ばされることはない」黙示録 10:6 新改訳。もうしばらくすれば、神の理想の教会が出現する。

その「定められた時」がやってくるときに、「遅延の時」が終わる。この研究を進めていくうちに、この事がさらに解明されるであろう。



世の人々は、この教会を通して主の栄光を見て喜ぶ！ 暗黒と無知の内に暗中模索している多くの人々は主の自己犠牲と自己否定の愛が信徒を通して表現されるのを見て、主を知るようになる！

主ご自身も、用意ができたご自分の花嫁を喜ばれる！

「シオンの義が朝日の輝きのようにあらわれいで、エルサレムの救が燃えるたいまつの様になるまで、わたしはシオンのために黙せず、エルサレムのために休まない。もろもろの国はあなたの義を見、もろもろの王は皆あなたの栄えを見る。そして、あなたは主の口が定められる新しい名をもってとなえられる。また、あなたは主の手にある美しい冠となり、あなたの神の手にある王の冠となる。あなたはもはや『捨てられた者』と言われず、あなたの地はもはや『荒れた者』と言われず、あなたは『わが喜びは彼女にある』ととなえられ、あなたの地は『配偶ある者』ととなえられる。主はあなたを喜ばれ、あなたの地は配偶を得るからである。若い者が処女をめとるようにあなたの子らはあなたをめとり、花婿が花嫁を喜ぶようにあなたの神はあなたを喜ばれる」イザヤ 62:1-5。

ダニエル 2 章 キリストの再臨の時、神の永遠の王国が出現することを知った。

ダニエル 7 章 キリストの再臨の前 1260 年の迫害期間の後にさばきの時がある。

ダニエル 8 章 調査審判は 1844 年 10 月 22 日から始まる。その時から聖所の清め一罪の除去が始まる。

「この特別な清め」が終わり、黙示録 14 章の 144,000 が出現すると主がおおいでになる(マラキ 3:1-4、エペソ 5:27、雅歌 6:10、大争闘下 141)。

1. 教会が完全な栄光の姿になってから。
2. 福音が全世界に宣べ伝え終わってから。
3. 聖なる集団が出現すると、世界伝道は、「義をもって速やかに終わる」！ (ローマ 9:28)。

これらの事はいつ成就するか？

ダニエル 8 章～12 章の更なる研究によって次の事が分かった。1844 年から死せる義人の裁きは始まったが、清められた栄光の姿の教会は今も現れていない。それどころかわが教会は 150 年経ってますますラオデキア状態が深くなってきた。しかし、「定められた終りの時」が来て、すべてが成就することが分かった。今までの「遅延の時」はまもなく終わる。「定められた終わりの時＝エス・ケッツ」は、「荒らす憎むべきもの」、すなわち日曜休業令が發布されてから始まる。日曜休業令からローマ法王至上権の復活と共に「サタンの驚くべき働きがやってきたこと、また、世の終りが近いことを知る」(5 T451)。しかしまた、「神の働かれる時が来たことを知りなさい」(7 BC980) と主の僕は言われた。詩篇 119:126 に「彼らはあなたのおきてを破りました。今は主のはたらかれる時です」と書いてある。その時こそ、サタンと神と神の民にとって正念場、決戦の時となる。これらすべてのことがダニエル 12 章の 1260 日、1290 日、1335 日のこの短期間に成就するのである。

「神の律法が全世界的に無視され、神の民がその同胞からの圧迫と迫害を受けるようになるその時に、主が介入なさるのである」 実物教訓 159

イスラエルは失敗した。キリスト教も失敗した。再臨信徒も失敗するのだろうか？地上歴史約 6 千年の終りの「定められた終りの時」に「必ず成就する」という約束がはっきり見えてきた！

世の終り、キリストの再臨は近づいているだろうか？ 近いことを知らせる証拠はたくさんある。しかしながら、近づくにつれ、「日は延びた、幻は空しくなった」と言い、「主人の帰りは遅いと心の中で思う」名目的再臨信徒がいることも事実である。(エゼキエル 12 : 22、マタイ 24 : 8、25 : 5)。

いよいよ終りが近づくにつれ、ノアの時のように再臨をあざ笑うものさえ出てくるということも預言されている。「主人の帰りは遅いと心の中で思う」つまり、時の切迫感が希薄になると、どんなことが教会の中に起こるかということも預言されている。「もしそれが悪い僕であって、自分の主人は帰りがおそいと心の中で思い、その僕仲間をたたきはじめ、また酒飲み仲間と一緒に食べたり飲んだり」する (マタイ 24:48,49)。

教会は、「叩きあい」「傷つけあう」、非難、誹謗し、迫害しあうようになる。聖書は「とくに信仰の仲間に対して、善を行おうではないか」と教えているにもかかわらず (ガラテヤ 6 : 10)。

「まず次のことを知るべきである。終りの時にあざける者たちが、あざけりながら出てきて、自分の欲情のままに生活し、『主の来臨の約束はどうなったのか。先祖たちが眠りについてから、すべてのものは天地創造の初めからそのままであって、変ってはいない』と言うであろう」(2 ペテロ 3:3,4)。

再臨信徒は、特に証の書を通して「欲情を制する」節制、正しい生活様式、健康生活についてたくさん教えられているにもかかわらず、「世俗欲」にひかれて生活するようになるというのである。約束の成就が遅くなって、神の約束に対する疑いが生活様式さえ乱してしまうのである。

再臨運動の先駆者の一人であった、ユライヤ・スミスは次のように歌った：

1.兄弟よ 忠実なれ 待ちにし主きまさん  
み国にて勝ちの歌を あぐる日は近し  
忠実なれ 死にて人を 救いませる主の  
限りなく深き愛を などてなみすべき

2.兄弟よ 忠実なれ 黄金の都は  
戸を開きなれを招く 永久のやすきへと  
忠実なれ 我ら長く 世にはとどまらず  
悲しみの夜はふけて あしたへと急ぐ

1. 栄光の姿の教会  
2. 世界伝道の完成



「主よ、聞いてください。主よ、ゆるしてください。  
主よ、み心に留めて、おこなってください。

わが神よ、あなたご自身のために、これを延ばさないでください。

あなたの町と、あなたの民は、み名をもってとなえられているからです。」

ダニエル 9:19

自分のこれまでの再臨信仰の遍歴を回顧してみた。

中学時代に真理の星を見た私は、どうにかその星をしるべに今まで歩き続けて 70 才になった。その星は、愛する主と「顔と顔を合わせて」相見るまで導いてくれるであろう。私が星から目をそらさない限り最後まで導いてくれると信じる。

小さな沖縄の片田舎に生まれたなりに等しい私にこんなに遠大な救いの計画を示し、計り知れない恵みを注いでくださった神をほめたたえたい。

時が延びて、世界の、教会の、自分の悲しい現状を見せられても、神の預言のみことばに支えられて、今日まで導かれたことを心から神に感謝したい。

**教会の現状を嘆き悲しむセブンスデー・アドベンチストの皆様、次のみ言葉を覚えようではないか。**

「危機はすみやかに迫りつつある。.... 光に歩む人々は近づきつつある危険の兆を見るであろう。しかし彼らは、神のさばきの日に彼の民を保護して下さるといふ期待をもって自分の心

を慰めつつ、無関心と平穩無事の態度でただ座ってはいならない。... 敬虔のパン種は全くその力を失ってはいない。教会の危険と沈下が最も激しい時に光の中に立っている小さな群れは、その国においてなされている憎むべきことに対し嘆き悲しむであろう。しかし教会員たちが世にならって行動しているがゆえに、小さな群れの祈りはいっそう教会のためにささげられるであろう。....

大きな光を持っている人々の家庭において宗教がいやしめられているのを見て、彼らは神のみ前に悲しむ。彼らが嘆きかつその魂を悩ますのは、教会内にごうまん、貪欲、利己主義とほとんどあらゆる種類の欺瞞があるからである。...

自分の靈的墮落に悲しみを覚えず他人の罪についても嘆かない人々は、神の印を受けないままにされるであろう (エゼキエル 9:6) 教会への証 5巻 p209-211 英文。

ダニエル 2 章から 12 章までの預言の理解が「夜明けのように、いよいよ輝きを増して真昼」となりつつあることに深い感動を感じる。

「こうして、預言の言葉は、わたしたちにいっそう確実なものになった。あなたがたも、夜が明け、明星がのぼって、あなたがたの心の中を照すまで、この預言の言葉を暗やみに輝くともしびとして、それに目をとめているがよい」 2 ペテロ 1:19。

「御霊も花嫁も共に言った、「きたりませ」。また、聞く者も「きたりませ」と言いなさい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」 黙示録 22:17。

この招きに応じて「わたしとわたしの家(家族と真理によって結ばれた兄弟姉妹方)とは共に主に仕えます」(ヨシュア 24:5)と今日、新たに献身したいと思う。



## 証の書より

### 真理と預言の漸進的展開

大争闘下 36

「聖霊の特別の光に浴した預言者たちでさえ、自分たちにゆだねられた啓示の意味を、完全に理解してはいなかった。その意味は、神の民が、そこに含まれている教えを必要とするにしたがって、代々にわたって示されるのであった」。

「教会史上の各時代は、その時代の神の民の必要に応じた特別な真理の展開によってそれぞれ特徴づけられている。新しい真理はみな、憎悪と反対を押しきって進んだ」。

キ実 105

「真理には、どの時代にも新しい発展があった。つまり、時代ごとに、その人々のための特別な神からの使命があった。古い真理はみな重要である。新しい真理は古い真理から切り離されたものでなく、古いものの解明である。古い真理を理解して始めて、新しい真理を悟ることができる。真理を新たに解き明かすことによって、輝く光が古いものをいっそう輝かしくする。新しい光を拒んでなおざりにする人は、実は、古いものを持っていない。それは、彼にとって、生きた力を失ったむなしい形式と化してしまうのである」。

2T 692-693

「この地上歴史の終末に関する特別な真理の展開が、地上に住む最後の世代までである」。

RH,9-25,1883

「聖書の中には、特に我々の時代に関係する真理が提示されている。聖書の預言は人の子が現れる直前の期間に焦点を当てている。その警告と脅迫は特に当てはまる。大終末の前夜まで延びているダニエルの預言的期間は、その時起る諸事件にあふれるほどの光(光の洪水)を投げかけている。黙示録もまた、最後の世代のために警告と教えに満ちている」。

1 希望 22

「だが定められた広大な軌道にある星のように、神の目的は急ぐことも遅れることもない。大いなる暗黒とけむるかまどの象徴を通して、神はアブラハムに、イスラエルがエジプトで奴隷生活を送ることを示し、その滞在期間は400年であると宣言された。『その後われらは多くの財産を携えて出てくるでしょう』と神は言われた(創世記15:14)。このことばに対して、パロが誇りとする帝国は、全力をあげて戦ったがむだだった。神の約束に定められていた『その日に、主の全軍はエジプトの国を出た』(出エジプト12:41)。同じように、天の会議では、キリスト来臨の時が決定されていた。時という大時計がその時間をさし示すと、イエスはベツレヘムにお生れになった」。

キ実 159

「神の律法が全世界的に無視され、神の民がその同胞からの圧迫と迫害を受けるようになるその時に、主が介入なさるのである」。

## 人の評判は神に任せよう

スタディバイブル(旧)872

「我々は、自分の権利を守るために重要でない過失をとがめたりしないという点で、人の模範となるべきである。偽りの噂が我々の周りに流布されることは予期することができる。しかし、もし我々がまっすぐな道をたどり、それらのことに無関心を保つなら、他の人々もまた関心を持たなくなるであろう。自分の評判を心配することについては、神にお任せしよう。そのようにして、神の息子また娘として、我々には自制心があることを示すのである。神の霊に導かれていること、そして怒るに遅いことを示すのである。中傷は、我々の生き方によって年月を経るうちに忘れられることがある。それは弁解の言葉や憤りで静めることはできない。神を畏れて行動することに大いに気を遣おう。そして、行動によってそれらのうわさは間違いであることを示そう。我々の品性を最も傷つけることができるのは、我々自身である。絶えず支柱などで支えられなくてはならないのは、弱った樹木やぐらつきのある家である。外部からの攻撃に対し自分の評判を守るために、非常に思い悩んでいるのを見せると、それは、神の前に何か非難されるべきところがあるために、いつも正当化しようとしているのだという印象を人々に与えることになる」(MS 24, 1887年)。

#### スタディバイブル(新)565

「神はこの教会に変わるように求めておられる。彼らは生きているとは名ばかりで、イエスの愛に欠けていた。ああ、どんなに多くの人が、救われているという信仰の告白に頼ったために墮落していることだろう。どんなに多くの人が、名を保とうと努めることによって失われていることだろう。もし人が、成功した伝道者、有能な教師、祈りの人、信仰の人、献身した特別な人という評判を得ているならば、神がお許しになる小さなテストによって試みられるとき信仰の破船に会う危険が大いにある。彼の大いなる努力は、しばしば自分の評判を保つためになされることもある。

自分の価値に対する他人の評価を恐れて生きている人は、我々を、神を賛美するにふさわしい者として下さる唯一のお方である神を見失っている。忠実な自己管理者になろう。自己から目を離してキリストを見よう。そうするならば、問題は何もなくなる。すべての働きは、それがどんなに優れたものに見えようとも、もしイエスの愛のうちに行われなければ、何の価値もない。彼は宗教活動を、すべてくまなく行ったとしても、彼の言動にキリストが組み込まれていなければ、彼はただ自分の名誉のために働いているに過ぎない」(Letter 48, 1903年)。

#### 1 希望 109

「木の価値は、その名によってではなく、その実によってきまる。もし実が無価値なら、名はその木が滅びるのを救うことができない。ヨハネは、神の前におけるユダヤ人の立場は、彼らの品性と生活とによって決定されるのだと宣言した。口に言うだけでは無価値である。もしユダヤ人の品性と生活が神の律法に一致していなければ、彼らは神の民ではない」。

### 教会名簿と小羊の命の書

RH, February 10, 1891

「我々は宗派として救われるのではない。いかなる教団の名も我々を神との好意関係に入れる徳があるわけではない。我々は主イエス・キリストの信者として個人的に救われるのである。『あなたがたの救われたのは、実に恵みにより、信仰によるのである。それはあなた方自身から出たものではなく、神の賜物なのである』。我々は最もすばらしい教会の名簿に名前が記されているかもしれないが、キリストに属していないかもしれないし、小羊の命の書に我々の名が記されていないかもしれない」。

## 難解な聖句：

### ダニエルは晩年には肉食をし、酒を飲んだ？

ダニエル 10：3 「すなわち三週間の全く満ちるまでは、うまい物を食べず、肉と酒とを口にせず、また身に油を塗らなかった。」

この聖句をある人は、晩年になってダニエルは肉食をし、酒を飲んでたと解釈する。1章にあるように青年時代は菜食であったが、晩年は肉食をしていたのであろうか。

バビロンの宮廷では、①神がイスラエルに与えられた汚れた食物(レビ 11、申命記 14)としていたものが食されていた。②そして肉は正しくない方法で料理されていたかもしれない。(血は使ってはならなかった、レビ 17：13,14)。③偶像にささげられていたかもしれない(出 24：15、使 15：29, 21：25;申命記 32：38)

彼は、これらの食物に関するおきてに忠実に従う人であった。晩年においても原則に忠実であることを彼はつらぬいた(国指下 156)

1. 「うまいもの」とは(chemdah=ケマダ)、いつもの彼の菜食
2. 「肉」とは(basar=バサル)、実際の肉
3. 「ぶどう酒」(yayin ヤイン)とは？ヘブル語で強い酒は Shekhar=シェカールという(民 28：7)。Tirosh(ティロシュ)は、発酵していない純粋なジュースのことに用いられる(民 6：3、イザヤ 65：8)

(yayin ヤイン)は、発酵した酒、あるいは純粋なジュース両方に訳される。ヘブル語からはどちらであったかは判別できない。従ってこの3節だけから彼が肉食をしていたか否か、酒を飲んでいたら否か結論を下すことはできない。

ところが次の4節を見ると、彼が断食したのは、アビブ(ニサン)の月であることが分かる。それは、過ぎ越しの祭り、種入れぬパンの祭りの間であることが分かる(出 12：1-20)。その時ユダヤ人は、過ぎ越しの羊を食べた。出エジプトの時から始まった神からの指示で、イエスが来られるときまで続いた。

この断食の間彼は、過ぎ越しの小羊も食べず、中東で日常に飲まれていたぶどうジュースも飲まず、彼が普通にしていたように、菜食の食事(1章)もしていなかったことを言っている。

この聖句をもって彼が肉食をし、ぶどう酒を飲んだと証明することはできない。彼はあまりにも重大な2300日/70週の預言を理解しようとして断食したのである。

Dr.フランクリン・ファウラー

アメリカがイラクに侵入してから殺されたイラク人の数 **1,139,602 人**

アメリカ軍人が犠牲になった数 **3,897 人**

イラク戦争に使われた費用 **\$479,257,053,121**

## 神様の学校（権利の放棄パートII）

オットー・コーニング（バプテスト系パプアニューギニア宣教師）

砂川満 訳

パイナップル・ストーリーでお話したように、自分の所有物を神様に明け渡した後、真の喜びが私の心の内にありました。何も持たないところに自由があります。心配の種がなくなるのです。夜もぐっすり眠れるし、精神も安らぎを取り戻しました。実にすばらしい生き方だ、と思いました。

ところが、またまた原住民が私を悩ませました。ある日、「お鍋が壊れてしまったので、直してくれないかしら？」と家内に頼まれましたが、「直す時間がないから捨ててしまいなさい」と答えました。他に新しい鍋があるのを知っていたからです。次の日、原住民の男が私の事務所に来て、「先生、ボクの壊れた鍋を直してくれ」と言うのです。その壊れた鍋というのは、前の日に家内が捨てたものでした。私は、「家内のために直さなかったのだから、君のために直すわけにはいかない」と答えました。すると彼に、「先生は俺たちを愛していないんだ。自分の物ばかり直して・・・けちん坊！」と言われてしまいました。私はけちん坊の精神に勝利したばかりでした。事実、どうやってその精神に勝利したか証をしていくくらいですから。私は、「せっかくの証を、そんなに早く振り出しに戻さないでくれ。あと十五年ぐらい待ってくれないか」と言いたい気持ちでした。オランダ人にとって、けちん坊の精神に勝利するというのは、大変なことなんです。それなのにこの男は、なおも私をけちん坊呼ばわりするのです。時間を惜しんでいるから、けちだと言うのです。私は彼にこう言いました。「けちだから断ったのではない。私にはやる事がいっぱいあ

るのだよ。翻訳の宿題も残っているし（それが何かは分かっていたはずですが）、現地語の勉強もしなければならぬ。私には、そんな物を直している暇なんか無いんだよ」。しかし、彼は執拗に、「先生は俺たちを愛していないんだ。愛しているのは自分だけなんだ」と言い続けます。真実をついている部分もあるので、あまり大きなことは言えませんが、私はこう言いました。「君たちを愛していなければ、このような未開のジャングルに来るわけじゃないか。保養のために来たとも思っているのか？家に向かいながらこう言いたまえ、『先生は俺たちを愛している。暇がないだけだ』と」。彼は私の助言に従うことなく、村中に私の悪口を言いふらしました。彼のお陰で、私の評判はがた落ちし、伝道の働きにも支障をきたしようになりました。



私は、鍋を直してあげなかったことを後悔し、その晩ほとんど眠れませんでした。自分に敵対するようになったあの男に、どうやってキリストの事を伝えたらよいだろう、と悩みました。皆さんなら、自分を憎んでいる人にどうやって伝道しますか？「もしかしたら、あの男は、福

音に対して生涯心を閉ざしてしまうかもしれない。そうなれば、永久に失われることになる」と考えたわけです。このように、聖霊が私の良心をちくちくと刺します。私はとても惨めな気持ちになり、眠ることができませんでした。あの男の怒った顔が、まざまざと浮かんできます。「彼の魂が減びるならば、それは私の責任だ」と考えると、悩みは深まる一方です。そこで、私は次のように祈りました。「神様、明日あの鍋を直しますから、どうか眠らせてください」。このように祈ったら、ようやく眠ることができました。

翌朝、あの男に連絡して、鍋をもってくるように言いました。今度は、彼のほうが当惑しています。昨日は冷たくあしらわれ、帰るように言われたのに、今日になって鍋をもってくるように頼まれたわけですから、わけの分からない白人だと思ったことでしょう。

それから、男にその鍋を持たせて、ハンドルの修理を試みていたところに、家内が現れたのです。新たな問題が浮上しました。家内は、「私のためには直してくれないのに、彼らのためなら直してあげるのね」という捨て台詞を残してその場を立ち去ろうとしたので、私は、「ちょっと待ってくれ。これには深い事情があるんだ。僕はこのために睡眠不足になり、解決のためにはこうするしかない、と、神様がおっしゃるんだよ」と必死で弁明することになったのです。

鍋を修理してもらった男は、すっかり機嫌を直してくれました。そこで、私は彼にこう言いました。「私は君のために一肌脱いだのだから、君も私のために一肌脱いでくれないか」。彼は、「一体何をやるのですか？」と尋ねました。すかさず私は、「君の家族を全員教会に連れてきて、聖書の話をお聴いてくれないか」と言いました。彼には貸しができたので、これでもしかしたら、彼とその家族をキリストに導けるかもしれない、と思いました。奇妙な伝道方法ではありますが・・・

ところが翌朝、大勢の原住民が外に並んで立っていました。彼らは各々、壊れたスコップとか、壊れたナタ、壊れた鍋などを手に持っていたのです。壊れたハーモニカをもってきた人もいました。その男は、「ボクのトトを直してくれ」と言うので、「君のトトは錆がひどくてもうだめだよ。私のパイナップル畑で雑草取りをしてくれたら、新しいのを買ってあげるから」と答えました。けれども彼は、「この方がいい音デル」と言い張ります。私は、「まさか、こんなオンボロがいい音を出すはずはない」と言いました。あんなにさび付いたハーモニカを、一体どこで見つけてきたのか、全くあきれてしまいました。彼が力いっぱいそれを吹くと、かろうじて一音だけ鳴りました。



全くひどい音でした。彼は、「パイナップル畑で働くのはめんどうだから、これを直してくれ」と言うのです。スコップも、柄が折れているものから、真っ二つに裂けているもの、金属部分が折れ曲がっているもの、ばらばらになっているものまで様々でした。私は自分の弓のこを取り出して、本当は直す価値もないスコップのリベットを切ることから始めました。しかし、修理を断るのも恐ろしい。またまた眠れぬ夜を過ごすのはごめんでした。途方にくれた私は、神様に祈りました。「主よ、一体どうしたことなのか、わけが分かりません。でも、あなたがやれとおっしゃるのでしたら、彼らのがらくたを直します」。

それでも、腹の虫がおさまらなかつたので、彼らに向かって、「全く、自分のがらくたは自分で直せばいいのに」と不平をこぼしました。

すると彼らは、「道具を貸してくれたら自分でやりますよ」と言います。いやいや、連中に私の道具を使わせるわけにはいきません。一度、誰かにやすりを貸したことがありました。貸すのは二十四時間に限定し、「ナタとナイフだけに使い、斧には使わないように」と注意したのですが、結局斧にも使ったようです。私のやすりがどうなってしまったと思います？全く信じられませんでした。彼らは交替で夜通しそれを使い続け、やすりがボールペンの表面よりもすべすべになっていたのです。信じられますか？二十四時間のうちにですよ。しかも、自分でそうしておきながら、「このやすりは使い物にならない」と文句を言っているんです。以来、彼らに道具は貸すまいと心に決めました。

結局その日は、彼らのがらくた修理に明け暮れました。次の日は、別の原住民ががらくたをもって押しかけてきました。どれも、救いようのないがらくたばかりです。「ただでさえ、翻訳と現地語の勉強に追われているのに、神様はこんな事に私を巻き込みたいのだろうか？」と思いました。現地語の勉強がどれほど進んでいるか、週に一度は本部に報告しなければいけないんです。作業をしながらも、常に不平不満を言っていました。「君たちは時間泥棒だ！人の時間をむだにするのもほどほどにしたまえ」といった具合に。「先生が俺たちに道具を貸してくれないからだ」と言うので、彼らに道具の使い方を教えようともしましたが、恐れていたとおり、またまた道具を壊されてしまいました。いらいらは募るばかりです。週に一度は、現地語の学習レポートを書かなくてははいけません。週に二十時間は現地語の勉強をすることになっていました。それが規則であり、守らなければ宣教師を続けてはいけなかったのです。現地語を習得しなければ、現地人らに福音を伝えることができなわけですから。そのような事情の下で、私はジレンマに苦しんでおりました。彼らは相変わらず、私の時間を奪いにやってき

ます。

年に一度の宣教師会議に行きました。がらくた修理を始めてからこの時までには、何か月も経過していました。ついに観念した私は、彼らに私の道具を使わせることにしました。「もう使い方は分かっただろう」と言って、弓のことドリルの使い方を説明しました。私が教えた連中は、何とか使いこなすことができるようになりました。「他の連中にも使い方を教えるんだぞ」と念を押したのですが、彼らは私の勧告を無視しました。彼らは自分の物を修理したら、使い方を知らない連中に道具を渡して帰って行ったのです。残された者たちが、道具を全部壊してしまいました。弓のこは刃が折れ曲がっていて、さんざんな有様でした。それから彼らは数週間後に再びやって来て、「他に刃はないか？」と尋ねるので、「道具箱にあるよ」と教えてあげたら、予備の刃と、ドリルのビットをことごとく壊されてしまいました。金づちまでも、折られてしまいました。一体どのような使い方をしたのか、さっぱり分かりませんでした。「君たちは何て事をしてくれたんだ」と言ったら、「先生の道具はどれもこれも役立たずだ」と言われてしまいました。

本当に腹が立ちました。それは、私が自分のすべての所有物を神様に明け渡していたことを忘れてしまっていたからです。彼らは、私に残された最後の弓のこの刃とドリルのビットまでも使わせろと迫ってきます。最後の物だけはどうしても使わせたくありませんでした。壊されるのは目に見えていたからです。「もう使わせてあげない」と



言ったら、再びけちん坊呼ばわりされてしまいました。最後に残った物以外は全部与えたのに、それでも私をけちん坊呼ばわりするのです。途方にくれた私は、「神様、最後に残った道具までも与えなくてはいけないのですか？」と祈りました。勿論、神様は即答なさいませんでした。私が答えを知っていたことを、主はご存知だったのです。とうとう私は、最後に残った道具を、彼らに手渡し・・・はしないで、彼らに向かって投げつけました。「いっそのこと今ここでぶち壊したらどうだ」という捨てぜりふを残して。

パイナップル・ストーリーにおいてすべての所有物を神様に明け渡した後、なんとも言えない喜びを心の底から味わうことができました。精神安定剤も要らなくなりました。健康状態も回復し、今度こそ、この部族をキリスト教に改宗させることができるぞという意気込みが湧いてきました。今度こそ、神様に有効に用いていただけたと思いました。宣教師となるべく自らの生涯を捧げただけでなく、自分の持ち物までもすべて神様に捧げたのですから。他にも捧げるべきものがあつたとは、思いもしませんでした。

神様が、天から私を見下ろしている様子を想像してみてください。「あの男はずいぶん幸福そうにしているな。夜もよく眠れるようになったみたいだ。喜びと自信にあふれ、今度こそ部族の者たちをキリストに導くことができると信じている。ここで水をさすのは気が進まないのだけれど、彼は八年かかって第一学年を修了したばかりだ。しかも、三十九歳になっている。他の学年を修了するのにそれほどの時間がかかったら、私の学校を卒業することはできないだろう。気は進まないけれど、次の学年を修学させねば」。神様は私のことをよくご存知で、追い詰められなければ私が降参しないこともご存知なのです。ほとんどの人は、プレッシャーがある程度強まれば、神様に対して降参すると思います。主は、私たちが物質的なものをす

べて明け渡すまで、私たちの物を取り去られることがあります。私たちが本当の意味で管理できないものを与えるほど、神様は愚か者ではありません。いつまでも存続しないものに固執する人こそが、愚か者なのです。

神様は、私の所有物と時間を支配したいと望んでおられます。主は言われます：「あの男は、まだ時間の領域において問題があるようだ。だからもしも、大勢の原住民を彼のもとに來させて、彼の時間を奪わせれば、恐らく降参するだろう」と。神様は、私のすべての領域を支配したいと望んでおられるのです。そこで、「この頑固なオランダ人を屈服させるには、これしかない」と言って、原住民を次から次へと私のもとに送られたのだと思うのです。私はいらいらしてしまいました。現地語の勉強をしなくてはならないし、教区の要求にも応えなくてはなりません。



夜にはまた安定剤が必要になり、パイナップル・ストーリーで味わった喜びも、どこかへ行ってしまいました。幸福だった時のことを思い出して、ますます落ち込んでしまいました。皆さんも、そういうことがありますか？「あの頃に戻りたいな」とか、「独身の頃は良かったな」とか・・・？年をとればとるほど人生が複雑になり、より単純で若さにあふれていた頃が懐かしくなることはありませんか。

原住民が次から次へとやってきたり、子育てに追われたりしていると、以前のように神様との個人的な交わりの時間がなかなか取れず、自分は背教に向かっているのではないかと不安に駆られることもありました。しかし実際

には、背教に向かっているのではなく、第二学年で学ばされていたのでした。より高いレベルの課題に四苦八苦していたわけですから、人生の学び舎にあって、以前よりも辛い境遇に置かれても、意気消沈し、くじけてしまっはいけません。この課題を修得すれば、次の学年に進級させてもらえるのです。そうは見えなくても、実際は向上しているのです。

当時は私もそのことが分からずに、神様に向かって訴えていました。「神様、お願いですから、この連中を何とかしてください。宣教師としての仕事を私が遂行できるように、彼らがここに来るのを阻止してください。神様、どうか助けてください。私の大切な時間が奪われています。私ひとりで、あれだけ大勢の人たちの要求に応えることはとてもできません」。しかし、どんなに祈って助けを求めても、神様は私の祈りを聞いておられないかのように思われました。それどころか、私のもとに持ち込まれるがらくたは、増える一方でした。かえって、神様がそのように仕向けているようにさえ思われました。なぜなら、いつしか他の村からも、原住民が押し寄せてきていたからです。神様に助けを求めれば求めるほど、状況は悪化していくように思われました。皆さんも、似たような経験をされたことはありませんか？

年次総会の時がやってきました。霊的な学びの集会もありますが、この時に、現地語学習のレポートも発表しなければなりません。参加する宣教師の中には、現地語を速やかに習得し、非の打ち所のない学習レポートを提出する優等生君もいます。この人は、現地語の勉強以外何もしていないのではないかと、皮肉を言ってやりたくなくらいです。参加者は四十人ほどいて、宣教師の妻たちも同席しています。その中で、この優等生君が先頭に立って自分の学習レポートを披露し、それから一人ひとりの宣教師に、「君の学習経過はどうか？」といった具合に尋ねて回ります。家内が私の耳元で、「あ

なたの番が来たら、一体何て言うつもり？」とささやきました。劣等生君と結婚してしまったという自覚がありますから、穏やかではありません。みんな、なかなか優秀なレポートを披露し、宣教師としての高い評価をもらっているようでした。いよいよ私の番が来ました。「コーニング先生、前回のレポートよりもいいものができましたか？」と尋ねられ、「いいえ」と答えるしかありませんでした。極めてばつが悪い状況でした。私をこの難局から救うために、すかさず次の質問が投げかけられました。「マルコによる福音書の翻訳は始めましたか？」この質問に対しても、「言語学習が思うように進んでいませんので、翻訳どころではありません」と答えるしかありません。面食らった彼は、「一体どういうことですか？現地では、何をしていますか？」と尋ねてきました。この質問にだけは、決して答えるまいと心に決めていました。家内にも、「私のがらくた修理をしているなどとは、絶対誰にも言うんじゃないぞ」と念を押してありました。家内だけではありません。原住民たちにも、「(教区の役員であろうが、政府の役人であろうが、物資を運んでくるパイロットであろうが) よそ者には決して、つまり誰であろうと服を着ている人には、私がやっていることを口外してはいけない」と言い聞かせてありました。私のところのがらくたを持ってくるすべての原住民に、「この事は秘密だからな」



と言い聞かせてあったのです。すると、たいていの人はいの次に反応します。「先生、これは俺たちだけの秘密で、ここでやっている事は、他の誰も知らないということか？」中には、こんな人もいました。「ここでやっている事は、世界中で俺たちしか知らないということは、俺たちが世界で一番あたまがいいということか？」私が、「そのとおり！」と答えると、彼は鼻高々にスキップしながら帰って行きました。私が念を押すために、「もし誰かにこの事を話したら、その人も僕たちと同じくらい賢くなってしまうからな」と言うと、誰もが「絶対に言うものか」と答えます。彼らは本気で、自分たちが世界一賢い人間だと信じていました。そのように信じ込ませることは、私にとっても好都合だったのです。

話をもとに戻しますが、「現地では何をしているのか？」と尋ねられたときに、私も家内も原住民たちも口を割らなければ、がらくた修理の件が発覚することはないだろうと踏んでいました。先の質問に対しては、「あれやこれや、いろんな事をしていきます」と答えました。嘘は言っていないよ。修理しているがらくたは、鍋だったり、ハーモニカだったり、スコップだったり、実にいろいろあるわけですから。すると、「コーニング先生、あなたは優先順位のリストを作り、現地語の学習をその上位に入れなければいけませんよ」と言われました。そんな事は、言われなくても分かっています。そ



れでも一応、これは何とありがたい助言だろうか、というような態度で話を聞いてい

ました。「はい、全くおっしゃるとおりです」といった具合に。素直に助言に同意したため、長々と説教されることなく、もう一年の猶予をもらいました。このようにして、何とかその場を切り抜けました。

年次総会に参加したついでに、発電機と電動工具を仕入れました。電動工具があれば、時間を大いに節約できると考えたわけです。さっさとがらくた修理を済ませ、現地語の学習にとりかかれれば、教区も神様も満足してくれるだろうと思いました。現地に戻るとすぐに作業台を作り、電動工具一式をそこに掛けました。これまで抱えていた問題も、これでいっきに解決できると考えました。ところがこの策は、パイナップル・ストーリーのシェパード犬のようなものでした。私がシェパード犬を使って問題を解決しようとしたのを憶えていらっしゃいますか。事態は好転すると思っていたのに、ますます悪化したのです。

再び、神様が天から見下ろしている様子を想像してみてください。「おやおや、あの男は、電動工具一式をそろえて得意になっている。ならば、もっとたくさんのがらくたを送り込んでやろう」。間もなくして、はるか遠く離れた部族の連中までも、私のところに押しかけてきました。彼らは少し背が低く、言語も異なっていて、最初は彼らの言っていることが理解できませんでした。それなのに、がらくたを持って押しつけてきたのです。一体どうやって、私のことを聞きつけたのでしょうか？お互いかたことのインドネシア語で、何とか言葉を交わすことができました。私は彼らにこう言いました。「君たちの地区にはカトリックの神父さんがいるだろう？彼のところにがらくたを持って行けばいいだろう」と。そしたら、「先生、神父さんは工具を持っていません」という答えが返ってきました。実にいまいまいしく思いましたが、私の負けです。結局、他の部族のがらくたまでも修理する羽目になりました。確かに仕事は速

くなりましたが、もっと多くの時間を取られてしまいました。仕事量が大幅に増えたのです。私は、神様に向かって叫びました：「神様、私はあなたに従いたくて、自分の問題を解決しようとしたのです。がらくた修理の仕事を速やかにさばくために電動工具もそろえました。それなのに、仕事は増えるばかりです。どうか、助けてください」。私が自分で問題を解決しようと躍起になっている間、神様は、私が完全に屈服するのを待っておられたのです。

そうこうしている内に、別の部族からもがらくたが押し寄せてきました。とても背の高い原住民でした。彼らは比較的、政府の近くに住んでいるため、物も多く持っています。当然、がらくたも多く出ます。今では、三部族のがらくたを修理していました。このままでは、さらに他の部族からも人々が押し寄せてくるに違いないと思い、途方に暮れてしまいました。文字通り、がらくた修理に明け暮れる日々でした。夜には、現地語の勉強が待っていました。私が過労で倒れるのではないかと、家内は心配しました。せっかくパイナップル・ストーリーの時にやめた精神安定剤を、再び服用していました。パイナップル・ストーリーで、「先生はクリスチャンになりましたね」と言われたのですが、今では、「先生はクリスチャンではありません」と言われていたのです。手痛い言葉でした。神様を喜ばせようと思って、懸命に働いていたのに、いつの間にか、不機嫌な人間になっていたのです。家内や子供たちに対しても、気難しい夫、父親になっていました。とても惨めでした。心を落ち着けて祈る時間も、御言葉を学ぶ時間もとれなくなっていました。ちょうどパイナップル・ストーリーの時のように、健康状態もほとんど限界にきていて、宣教師の仕事ももう続けられないと思いました。

ひざまずいて祈りました。「神様、私はどうすればよいのでしょうか？がらくた修理は、あなたが私に求められた事なのではないでしょ

うか？しかし教区からは、さらにハードな言語学習を求められます。両方の求めに応じるのは無理です」。神様に向かって熱烈な訴えをし、助けを請い求めました。それでも、答えはありません。とうとう祈り疲れて、黙りこくりました。



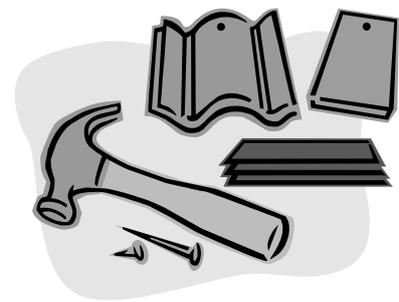
皆さんも、そのような経験はありますか。しかし、そういう時こそ、主からお言葉を賜わることができるのです。心に質問が与えられました。「お前が自分の所有物を私に明け渡したときに、何が起こったか？」「神様、パイナップルを始め、あなたは私が捧げたすべての物を祝福してくださいました」。突然、光が差し込んだように思われました。「神様、私の時間もあなたにお捧げいたします。あなたが私に、一生がらくた修理をせよと言われるのなら、そのようにいたします」。このようにして、私は自分の時間を神様に明け渡しました。明日からは、喜んでがらくた修理にいそしもうと決心しました。その晩、「神様、残りの生涯、あなたが私に何を望まれようと、私の所有物同様、時間もあなたのものです」と祈ってから、眠りにつきました。

翌朝、いつもの如く、がらくたを手にした原住民が私を待っていました。私は、彼らに向かって微笑みかけました。連中は、信じられない、といった顔をしていました。私は優しく、「では、さっさと仕事に取りかかろうか」と言いました。二、三日たってから、「先生、またまたクリスチャンになりましたね」と言われました。あまり嬉しい褒め言葉ではありませんでしたが、何と言われようと、喜んでがらくた修理に取り組むことにしていましたので、動ずる

ことはありません。もはや、気難しい態度ではなく、快活に仕事をしながら、彼らにキリストのことを教えていました。修理を終えたら、「私のために教会に来て、キリストのお話を聴いてくれないか？家族の人たちも連れてきてくれたまえ」と頼みました。本国に連れ戻されるかもしれないという危機感を覚えていましたが、実のところ、それだけはいやでした。当時、私の父はまだ生きていました。父と私の間には、ある問題がありました。私は次男坊ですが、兄は何でもできる利発な子供でした。それに比べて、私は何をやっても鈍くさい子供だったのです。何かにつけて兄と比較され、しばしば父親からは、「お前は何のとりえもない奴だ」と言われていました。そのために、反骨精神のようなものが私の中にありました。いつか自分にも取り柄があることを証明してやりたい、と思っただけのような気がします。それが幸いしたかどうかは分かりませんが、兄弟の中で、私だけが高校を卒業しました。他の兄弟よりも私の方が賢かったわけではありませんが、その後、大学も卒業することができました。宣教師になってからも、まだ心のどこかで、「自分にもとりえがあることをお父さんに証明しなければ」と思っていました。ですから、どうしても挫折して本国に戻るわけにはいかなかったのです。父親はまだ生きていましたから。亡くなっていれば、話は違っていただいかもしれません。「やっぱりお前は何のとりえもない奴だ！」と言われずに済んだでしょうから・・・

快活に仕事ができるようになると、頭を切り替えることもできるようになり、がらくた修理を伝道に利用しよう、という考えが浮かんできたわけです。私にがらくた修理をしてもらった人は、家族も一緒に、全員が教会へ来るようになりました。やがて、がらくた修理をしに、自分から他の村へ足を運ぶようになり、その結果、他の部族の人たちもこぞって教会にやってきました。私が行くところどこでも、人々は教

会にやってくるようになりました。ある日、家内のためにロッキング・チェアを直していたら、窓の外からその様子を見ていた原住民のひとりが(連中はいつでも平気で窓の外から他人の家を覗きます)、「先生、手伝いましょうか？」と言いました。私は、「よろしく頼む」と答えました。彼は家の中に入ってきて、上手に私の手伝いをしてくれました。修理を終えてから、「報酬は何が欲しい？」と尋ねると、「何も欲しくはありません」と答えるではありませんか。すっかり面食らってしまった私は、「本当に何も欲しくはないのか？」と聞き返しました。彼は、「いいえ、先生は俺のスコップを直してくれた。お礼に、手伝うのは当たり前」と言うのです。彼らの中で、何か変化が起こっていました。愛は、愛によって目覚めさせられるのです。原住民が教会へ来るようになったので、これまでよりも容易に、彼らにキリストを紹介することができるようになりました。しかしながら、現地語の学習は、全く進んでいませんでした。机に向かうことすら、ほとんどありませんでしたから。大勢の原住民が、教会にやってくるようになりました。特に、一家のあるじである男たちには、お祈りの仕方を教えました。教会は活気づいて良かったのですが、まだまだ問題は山積していました。家内が、「今度の年次総会では、どんな言い訳をするつもり？あと四か月しかありませんよ」と尋ねました。私は、「分からない。でも、今度こそごまかしは通用しないだろう」と言いました。「いいかげん、がらくた修理はやめたらどうですか？」と懇願する彼女に、「神様がやめさせてくださいらないのだから、仕方がない」と答えると、頭を振って、その場から立ち去ってしまいました。



年次総会があと二か月に迫っていた頃、教区から、宣教師の調査のため、お偉いさんがやってくることになりました。言うなれば、彼は私の上司で、私の至らないところを探し出し、まずい点があれば厳しく指導してやろうと思っ  
て来ているわけですが、彼は現地語が全く話  
せません。そういう意味では、私のほうに地の  
利がありました。

そのお偉いさんは、土曜日の午後に着することになっていました。ちょうどその頃、私は十人の男たちに教会での説教の仕方を教えていました。その男たちにこう吹き込みました：「もうじき、我々を調査しに（実のところ調査の対象は私だけでしたが）ある人がやってくる。その人には、我々のいいところだけを見せなくてはいけない。決してへまをしないように」。それから、最も優秀な男を選び、彼に向かって、「明日の集会では、君が説教をするように」と指示を与えました。彼は、「何を話していいか分かりません」と言うので、「何でもいいから、自分が一番得意の、お気に入りの話をしなさい」と助言を与えました。「とにかく大きな声で、熱心に話しなさい。同じ話を二度繰り返してもいいから（どうせ、教区のお偉いさんには分かりっこありません）」。それから、一番歌の上手な男に、讃美歌礼拝を担当させました。このようにして、教区からの訪問者を迎えるのに、準備万端ととのえました。会衆に対しても、普段以上に大声で賛美歌を歌い、説教を聴くときには頭を振って「アーメン、アーメ



ン」と言うように指示を出させました。

とうとう、そのお偉いさんが物資運搬用の飛行機でやってきました。出迎えた私と握手を交わすや否や、彼は思っていたとおりの質問を投げかけてきました。「現地語の学習は順調に進んでいるんだろう？」私が「はい！」と答えるのを大いに期待している表情でした。ところが私は、「いいえ、あまりうまくいっていません」と答えたのです。彼の期待を裏切ったことについては、本当に申し訳ない気持ちでいっぱいでした。「聖書の翻訳は始めたんだろうね？」との問いに対しても、「いいえ、まだ現地語をそこまで使いこなすことができません」と答えるしかありませんでした。彼は明らかに失望した表情で、「オットー君、君は一体ここで何をしているんだね？」と尋ねました。私は心の中で、「それだけは決して言うまい」と思いました。念を押してありますので、家内も原住民の人たちも決して言わないはずです。私のもくろみでは、彼の任務は失敗に終わることになっていました。「君はここで何をしているんだね？」との質問に、私は、「あれやこれや、いろんな事です」と答えました。勿論、そんな曖昧な答えで満足してくれるわけはありません。彼はさらに、私に詰め寄ろうとしましたが、そのたびに原住民たちが話に割り込んできます。彼らは、いつもこのように無作法なのですが、この時ばかりは私にとって好都合でした。お陰で、追い詰められずに済んだわけですから。そして、彼らは私に向かって、「先生、見て見て！この白人、実にまぬけな顔をしているね。この人は、何も知らないんでしょう？洋服は着ているけれど、俺たちよりも頭が悪いんだ。俺たちが世界で一番頭がいいんだから。そうでしょう？先生」と言うので、私も調子に乗って、「そのとおり！」と答えると、みんながお腹を抱えて笑い転げていました。私もこらえきれずに大笑いしてしまいましたが、教区からの訪問者だけは、何がなんだかわけが分からないという顔をし

ていました。「何がそんなにおかしいのだ？」と訊かれたので、「ここの部族特有のジョークなんです。訳すのは、ちょっと難しいですね」と答えてしまいました。結局そこでは、このようにして難局を乗り切ることができました。

それから、彼を私の住宅に案内しました。彼は私の作業場を見て、目を丸くしてしまいました。電動工具など、設備が整っていることに驚いたわけです。彼は思わず、「ここでは何をやるんだ？」と訊いたんです。勿論、これはおかしい質問です。作業場では、壊れた物を修理するに決まっていますから。しかしこの時、私は作業場をきれいに片付けてあり、念のために修理中の物も置いていませんでした。工具はきちんと壁に掛けてありました。それから、「君はここでかなりの時間を費やすのかね？」と訊いてきました。その質問だけはして欲しくなかったのですが、幸い原住民たちが窓の外から覗いていて、やじを飛ばしたりしていました。とっさに、「外が騒がしいですね。何かあるみたいですよ」と言って、彼を作業場から外に連れ出しました。このように、原住民のお陰で、何度も窮地を脱することができました。

日曜日の朝になりました。いよいよショーの始まりです。集会の開始を知らせる鐘が鳴ると、教区からのお偉いさんが、「そろそろ教会



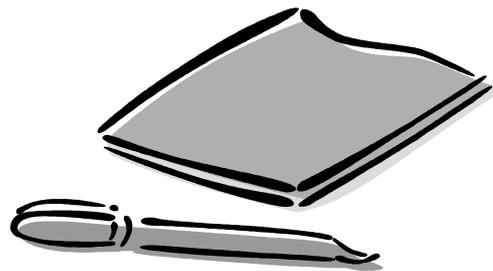
に行きましようか」と促すので、私は、「いいえ、私たちは一番後に入って行くことになっています」と言いました。集会が始まるのを待ってから、私たちは中に入り、席につきました。間もなく、説教が始まりました。私が説教者を選んだ男は、期待以上の働きをしてくれました。熱烈に大声で語り、メッセージ自体もすばらしい内容でした。そして、会衆も盛んに「アーメン、アーメン！」と応えていました。また、この日に限って、教会は満員の状態でした。他の村からも、応援が駆けつけてくれていたようです。讃美歌礼拝も活気にあふれていました。その原住民はあまり歌が上手ではありません。にもかかわらず、みんな一生懸命歌っていました。集会を見て、彼は、全く信じられないといった顔をしていました。

集会が終わってから、彼は、「今でも信じられない」と言いました。「会衆の賛美といい、あの説教者といい、実にすばしかった！ところで、あれは全部君が指導したのかね（他に誰が指導したというのでしょうか）？」という具合に、すこぶる感心した様子でした。「君が受け持っている教会はいくつあるのかね？」と尋ねるので、「三つです」と答えました。するとまた、「本当に信じられない」を連発しています。「君がここに来てから、何年になるのかね？」と尋ねるので、「八年くらいです」と答えました。彼はこう言いました：「この地方で、これほど盛んな教会は見たことがない。しかも、たった八年で、これほどの教会成長を遂げたと言うのかね？いやあ、信じられんなあ」。彼によると、私の教会は、他と比べれば五年から十年も進んでいるそうなのです。「君はここで、どんな事をしているのかね？」と尋ねるので、「たっぷり時間をかけて、現地の人たちと交わっています（がらくた修理をしながらですが・・・）」と答えました。さもありがたそう、といった様子でした。集会中のお祈りにも、感銘を受けたようです。彼らは目立ちたがり屋なので、集会の時

には、われ先にとお祈りの役を買って出ます。彼らの気持ちを汲んで、集会中は賛美歌の合間にも、証と証の間にも代わりばんこでお祈りをさせることにしました。不思議に思った彼は、「どうしてそんなに大勢の人がお祈りをするのか？」と尋ねたわけです。私は、誰もかれもお祈りの役を買って出るので、みんなにお祈りをあてるのにとっても苦勞していると説明しました。非常に驚いた彼は、「私の教会では、誰もお祈りをしたがないのに・・・この教会は本当にすごい！」と言って、ますます感心していました。私が自分の時間を主に捧げていたことについては、無論知る由もありません。最後に彼は、「どうぞ、今の働きを継続してください」と言って、月曜日の朝にそこを去りました。事実上、私にがらくた修理を継続する許可をくれたわけです。無論、その事を知らずにですけれども・・・。

再び、年次総会に出向くことになりました。現地語学習のレポート発表の前日、私も家内もなかなか眠れませんでした。いよいよ年貢の納め時です。これで私たちは、本国に帰されるだろうと思いました。明日、私の評判は地に墜ちることでしょう。「評判」は、私にとって、神様の学校の第三学年における課題でありました。第一学年では私の「所有物」を明け渡すことを学び、第二学年では私の「時間」を明け渡すことを学んだわけです。事実、私の時間を主に捧げて以来、喜びにあふれる生活を取り戻すことができました。精神安定剤も不要になりました。「これで神様は、私を思う存分用いることがおできになる」と信じていました。ところが神様は、天からご覧になり、「ああ、ようやく第二学年を修了したようだ！進級させて、学びを継続させよう」とお考えになったはずです。なぜなら主は、私がキリストのみかたちを反映させるようになることを望んでおられるからです。皆さんに対しても、神様が抱いておられる理想は同じです。ですから皆さんも神様の学

校で学んでいて、そのために奮闘し、苦しんでいらっしゃるかもしれません。主は、私たち全員が、キリストのようになることを望んでおられます。そのために、私たちを学校に入れるわけです。この事だけは、はっきり申し上げておきたいと思います。クリスチャンになろうと決心する人には、神様の学校での様々な課題が待っています。神様は、私たちがすべてを主に明け渡して、幸福になることを喜ばれるのです。できることなら、私たちが苦しまないで済むようにと望んでおられます。初めから、私たちが主にすべてを明け渡して、各学年の学びを修了できれば、と望んでおられるわけです。親も、できれば子供を懲らしめることなく指導していきたいと考えます。しかし、時にはどうしても懲らしめのむちが必要なのです。



現地語学習レポートを発表しなければならぬ前の晩、私は再び神様に嘆願していました。「神様、このままでは本国に帰されてしまいます。どうすればよいのでしょうか？私はあなたのために働きたいのです」。さんざん訴えたあげく、私は沈黙しました。すると再び、「お前が自分の所有物を私に明け渡したときに、何が起こったか？」との問いが聞こえてきました。神様はしばしば、私たちの質問に、質問をもってお答えになることがあります。聖書にも、そのような事例が数多く載っています。次に、「お前が自分の時間を私に明け渡したときに、何が起こったか？」との問いが、心の中で聞こえてきました。「私の宣教区では、伝道が十年も先を行っていると言われました。しかも私ががらくたを直してあげたので、人々は進んで教会に

来るようになりまして」と答えました。そして突然、自分の評判が失われるのを恐れていることに気がついたのです。「神様、私の評判もあなたにお捧げいたします」と祈りました。朝になれば、どうせ失うことになるわけですから。でも、それを失う前に放棄することが重要なのです。皆さんも、それが何であれ、選択の余地が残されている間に、自分のものを主の祭壇に捧げましょう。「神様、明日どのような処分が下されようとも、喜んでお受けいたします。本国に帰されることになっても構いません。そして父から、『やっぱり、何のとりえもない奴だ』と言われようとも、微笑んでいたいと思います」。父に対する反発も、結局は私が自分の評判を気にしていたことが原因だったのです。自らの評判を主に明け渡すならば、人間関係におけるほとんどの問題は解消されます。私の心に、喜びが戻ってきました。たとえどのように思われようと、すべて正直に話す決心をしました。

いよいよ学習レポート発表の時がやってきました。私の心境の変化について何も知らない家内は、最初から赤面しています。彼女の身になって考えれば、でき損ないの夫を持つ妻として同席しなければならないわけですから、ばつが悪いのも無理ありません。そういう彼女の横で、私はニコニコしていました。自らの評判をも放棄した私には、何も失うものがなかったわけです。ニコニコしている私を見て、家内は、「何をニタニタしているの(こっちはニコニコしているつもりなのだけど・・・)? 気は確かなの?」と囁きました。この日が近づくにつれて、私が苦悩していたことを知っていましたから、とうとう、神経のどこかがぷつぷつ切れてしまったかと思ったようです。報告会はすでに始まっていて、私の番が近づいてきていました。家内は私に、「何をお話するつもり? 訊かれない事は、答えなくてもいいのですよ」と言いました。「分かっている。でも、嘘だけはつかないつもりだ」と答えて平然としている私を、

全く理解できないようでした。いよいよ私の番がやってきました。司会者の方が、「コーニング先生、先の総会以来、現地語の学習に進展はありましたか?」と尋ねました。私が満面の笑みを浮かべながら、「いいえ」と答えたので、すっかり面食らっていました。驚いたことに、彼はそれ以上何も言わずにうつむいてしまったのです。彼だけではありません。出席している宣教師たち全員が、うつむいてしまったのです。最初からうつむいている家内を含め、私以外の全員がうつむいてしまいました。皆さんも一度試してみてください。まじめな集まりで、自分がしくじったことを告白し、そして微笑むんです。居合わせた人たちは、この不自然な組み合わせにどう反応してよいか分からなくなります。但しその前に、自分の評判を祭壇に捧げなければなりません。そうでないと、まじめな集まりで自分がしくじったことを告白しておきながら、微笑むことなんかできないはずで

す。うつむいている人たちを見回して、「ああ、私は自由だ!」としみじみ思いました。すると突然、私のところへ視察に来た宣教師が立ち上がり、次のように発言しました。「ちょっと待ってください。コーニング兄弟の処遇について話し合う前に、言いたい事があります。どうか皆さんも、彼が担当している教会へ行って見てください。私はそこへ行って、集会に出席しました。原住民の説教と、会衆の賛美を皆さんも聴くべきです。そこでは、みんながお祈りをします。我々は、この兄弟から学ぶべ



き事が多くあるはずですよ！」全員が顔を上げ、司会者の人が、「とても良い報告を聞かせてもらいました。ところでコーニング先生、現地では何をなさっているのですか？」と言いました。なんだか自分にとって状況が好転しているようだったので、自信が湧いてきて、「たっぷり時間をかけて、現地の人たちと交わっています」と答えました。調子に乗って、「あれこれと、何でもやっています」とも言いました。それから、別の人が立ち上がり、「コーニング先生、あなたはどんな伝道方法を用いていらっしゃるのですか？」と尋ねました。少々まごつきましたが、「時間をかけて現地人と交わると、彼らは教会に来てくれるようになり、多くの人々が神様を受け入れたんです」と答え、みんな納得してくれて、「すばらしいですね。今の働きを継続してください」との励ましまでいただきました。これで事実上、教区からもがらくた修理の許可をもらったわけです。こうして、無事に総会を終えて戻ってくることができました。

皆さん、問題に直面したときは、孤軍奮闘するのではなく、神様にすべてをお任せしましょう。神様の学校において、飛び級はできません。世の学校においても同じですよ。『○○君は読み書きがうまくできないので、とりあえず、算数のお勉強だけさせましょう』と言う先生はいないはずです。神様も、私たちが一つの課題を修得するまで、あの手この手でプレッシャーをかけてきます。私の父は、第一学年も修了することができませんでした。オランダ人特有の、物に執着するタイプでした。戦時中、ドイツ人に奪われないように、銀の宝物をどこかに隠しました。戦争が終わって、それが見つからなかったのが、逆上していました。自分のためには、決してお金を使いませんでした。大変な働き者でした。いくつかの仕事を掛け持ち、それで儲かっても、どういふわけか儲けがばあになるんです。そのような事態に追い込んでま

で、神様が父に教えようとしておられたのだと思います。教会には、惜しまず献金をする人でした。教会に多く捧げれば、それだけ見返りも大きいと考えていたのです。教会に献金し、自分のためにも多く蓄えようと思いました。それを自分のために使うことはありませんでした。七十七年の生涯を終えたとき、父の残した遺産は、半分しか支払いが済んでいない小さな家だけでした。これが働き詰めの生涯を送り、教会に多額の献金をし、蓄えることに懸命だった人の結末であります。

昏睡状態になって息を引きとる前に、彼は私と私の息子にこう言ったのです。「自分自身のために財産を蓄えようとするな。金持ちになろうとしてはいけない。イエス・キリストだけに仕え、あとは何も思い煩うな。神様に仕えること以外、重要なものは何もないから」。皆さん、お分かりですか。私の父は、死の床にあって、ついにすべてを放棄したのです。その時、彼は第一学年を修了したと私は考えています。しかし悲しいことに、彼に終業式の喜びを味わう時間は残されていませんでした。

その年、私は宣教地区の顧問に選ばれました。長年、やってみたいと思っていた役職です。これまで、その役職を獲得するために、できる限りの犠牲を払い、努力を惜しみませんでした。しかし、どんなに根回しをしても、役員たちに好印象を与えようとしても、選出されることはありませんでした。総会のたびに、くやしい思いをしていました。ところがその年の総会には、もはやそんな事を気にすることなく、平安な気持ちで臨むことができました。自分の評判を捧げたわけですから、上の地位に就きたいという思いはなくなっていました。そうしたら、誰が最初に選ばれたと思いますか？ どういうわけか、この私が選ばれたのでした。イエス様は、「自分を低くする者は、高くされるであろう」と言われましたね（マタイ 23:12）。これは、真理であります。天が定めた法則なのです。反

対に、自ら高ぶる者は、卑しめられるでしょう。

「だから、あなたがたは、神の力強い御手の下に、自らを低くしなさい。時が来れば神はあなたがたを高くして下さるであろう」(1ペテロ5:6)。神様は力強い御手を持っておられ、実に様々な方法を用いて、私たちに教訓を与えようとしておられます。神様の学校においては、さらなる学年へと進級していかなければなりません。私には、あと何学年残っているのか分かりませんが、第五学年あたりから、私もようやくコツをつかみました。神様から権利を放棄するように求められているのだと分かったと、すぐに応答して捧げるようになりました。しかし、第四学年は私の子供たちでした。子供たちを祭壇に捧げるのに手間どり、とても苦労しました。子供を本当に失いかけたときに、ようやく悟ることができたのでした。辛い経験でした。第五学年は私の妻でした。

今日、教会においても、傷ついている人たちを多く見かけます。なぜクリスチャンが傷つくのか、驚きを覚えます。ある姉妹が癌を患い、死期が迫ってきました。彼女は生涯教会に通い続け、什一も諸献金も忠実に捧げてきました。私は天に向かって、「神様、一体どういうことですか？この女性は信心深い人です。生涯あなたに仕えてきたではありませんか？どうして、最期にこれほど苦しまなくてはいけないのですか？」と訴えました。他にも、多くのクリスチャンが苦しんでいます。時には、クリスチャンが福音を知らない世の人々よりも苦しむことがないでしょうか。そのような時に、当惑することがないでしょうか。皆さん、私たちは神様の学校に在学しているのです。世の人々はそうではありません。主は、私たちがキリストのようになることを望んでおられます。そのために、私たちに圧力をかけられることがあるのです。それに応えないと、さらなる圧力が加えられます。キリストに似る者とするために、主は私たちが病床につくことをお許しになるかも

しれません。

クリスチャンが病気で臥すことになったら、神様に助けを呼び求めないでし



うか？かの女性信者は、一つの領域において、まだ自分の権利に固執していたのかもしれない。すべての権利を放棄していたら、主は病気の苦しみを、あるいは病気そのものを取り除かれたかもしれないのです。私は思うのですが、病気の人が健康になる権利を放棄しない限り、その人のために油注ぎの祈りすらやるべきではありません。健康であれ、時間であれ、妻子であれ、自らの評判であれ、能力であれ、すべての領域を主に捧げなければいけないのです。多くのクリスチャンが味わっている苦しみのほとんどは、本当は避けられると思うのです。確かに、他の理由で苦しみがやってくる場合もあります。しかし、クリスチャンの中に見られる苦しみの最大の理由は、教会を清めるために神様がお許しになる試練、訓練であります。神様は、私たちを純金にするために、必要とあれば火のような試練をもお許しになるのです。そして、私たちが権利を明け渡しさえするならば、多くの試練や苦しみを避けることができるのです。ですから、皆さんが苦しんでいる人を見かけたら、「神にすべてを明け渡しなさい」と言ってあげてください。私たちがすべての権利を放棄して主に委ねるとき、主が最善と思われることを行ってくださるでしょう。繰り返しますが、神様のご計画は、私たちがキリストに似る者にまで成長することなのです。

「神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている」(ローマ8:28)。

# マザー・テレサ40年間の信仰の危機



HOME U.S. WORLD BLOGS BUSINESS & TECH GLOBAL BUSINESS HEALTH & SCIENCE  
ENTERTAINMENT MULTIMEDIA MAGAZINE SPECIALS

貧しい人に命をかけた奉仕で世界的に有名になったカトリック信者、マザー・テレサは 1979 年にノーベル賞受賞。しかし…臨終にこんな苦痛があったとは…

CNN.com/WORLD

SEARCH GO

MAIN PAGE  
WORLD  
U.S.  
WEATHER  
SPORTS  
BUSINESS  
POLITICS  
LAW  
TECH  
SPACE  
HEALTH  
ENTERTAINMENT  
TRAVEL  
EDUCATION  
IN-DEPTH

## Archbishop: Mother Teresa underwent

大司教曰く：マザー・テレサは悪魔払いを経験した—2001年9月7日

Telegraph.co.uk



Home News Sport Business Travel Jobs SEARCH  
Motoring Telegraph TV @WebWeb

News home  
UK Politics  
Law reports  
Obituaries

## Mother Teresa's diary reveals her crisis of faith

"... Where is my Faith - even deep down right in there is nothing, but emptiness & darkness - My God - how painful is this unknown pain - I have no Faith - I dare not utter the words & thoughts

日記の一部：  
「…私の信仰はどこに？—私の奥深いところには空しさと暗黒以外何もありません。—我が神よ、この計り知れない苦痛—私には信仰はない—心につまる言葉も思いもあえて言いません—それは口で言い表せない苦痛です」

### MOTHER TERESA QUESTIONS GOD'S EXISTENCE



彼女の手紙、日記は一般に知られている立派な修道女として、またノーベル平和賞受賞者というイメージとは全く異なる女性であることを提示している。

聖人と認められる可能性が高かったマザー・テレサは、神を疑い始めていた事実を認めた。そのことを考慮に入れて伝記は書き直されなければならないであろうということが昨日ローマで発表された。

カルカッタの貧しい人たちの間で何年もの間働いたマザー・テレサが、1958年に次のように書いた：「私の微笑は多くの痛みを隠す大きい外套です」....

ダイアナ、ウェールズのプリンセスによって大いに称賛されたマザー・テレサは、ある手紙で

言った：「地獄のいまわしい者たちは、神を失った経験のため永遠の罰を苦しんでいます。私自身の魂もこの損失の恐ろしい痛みを感じます」。「神は私を欲していない、神は神ではない、そして神は本当に存在するとは感じません」。

ローマのポピュラーな日刊紙“Messeggero”には：「マザー・テレサの真実はこうである。最初の1年はビジョンを持っていた。しかし後の50年は疑いを持っていた人であった—彼女の死まで」とある。

彼女の疑いの期間は、ビジョンを持ち始めてからカルカッタの学校の教師をしていたが、やめてインドの貧しい人々を助けることを決意した時と同じ時である。

※ 彼女の苦痛は、悪魔的な何者かの圧迫から来たのであろうか。カトリックの中には同じ苦しみの虜となっているものが大勢いるかもしれない。E. G. ホワイトは、「その中(バビロン)には、まだ真のキリスト者が数多くいる」と言っているが、早く彼らが解放されるように祈りたいと思う。マルチン・ルターも長年バビロンの苦痛にあえいでいたが、信仰による義の光が彼を解放して宗教改革のチャンピオンとした。

## カトリック教会以外は真の教会にあらず

### Pope: Other denominations not true churches

#### Benedict issues statement asserting that Jesus established 'only one church'

MSNBC News Services  
updated 9:52 a.m. ET July 10, 2007

LORENZAGO DI CADORE, Italy - Pope [Benedict XVI](#) has reasserted the universal primacy of the Roman Catholic Church, approving a document released Tuesday that says Orthodox churches were defective and that other Christian denominations were



Jews have concerns over

Latin mass

July 10: NBC's Stephanie

無謬(絶対に間違わない)主張者、法王ベネディクト一世は「カトリック教会のみが唯一の真の教会である。宗教改革から生まれたプロテスタント教派は、真の教会でなく、宗教的共同体である」と宣言したと、二〇〇七年七月十日CBCニュースは伝えた。

「カトリックは決して変わらない」

「ローマ教会の計画や運営方式には遠大なものがある。この教会は、再び世界を支配するために、また迫害を復活させるために、またプロテスタントが行なったすべてのことを無効にするために、激しい決定的な戦いの準備として、その感化力を広げ、その勢力を強めようと、あらゆる手段を用いている。カトリック教は至るところに地歩を占めつつある」 大争闘下321

## 2008年 春季セミナー 4月1日～7日の案内

### ゲスト・スピーカー (4月1日夜と翌2日)



#### デニス・スミス牧師

デニス・スミス牧師はセブンスデー・アドベンチスト南ニューイングランドカンファレンスのニューヘイブンスDA教会の牧師である。アンドリュース大学卒、ロマリング大学の公衆衛生部を卒業、聖霊の研究を福音医事伝道に生かしておられる。

今日、キリスト教会の誤った聖霊運動に様々な不思議が見られる。我々は偽りバイバルを警戒するあまり、最も重要な聖霊についての研究と聖霊に満たされる経験と働きに欠けているのではないだろうか。

現代医学と信仰によるいやしと自然療法のバランスのとれた癒しの聖書的考え。肉体的、精神的な悪霊の働きにどう対処したらいいか。

著書に次のようなものがある:

- ✓ 聖霊のバプテスマと伝道
- ✓ 聖霊のバプテスマと教会の交わり
- ✓ 聖霊のバプテスマといやし
- ✓ 聖霊のバプテスマと祈り
- ✓ 聖霊のバプテスマと再臨への備え
- ✓ 聖霊のバプテスマとキリスト者の勝利

インドネシア、マレーシアでのセミナーの途中、沖縄でも講義して下さる。3日目はインドネシアへ出発。

希下 158 神の力は、彼らが求め、受けるのを待っている。この約束された祝福を信仰によって求めるときに、ほかのすべての祝福は次々と与えられる。

1SM156,157 偉大な教師であったキリストは、選ぶことのできる無限のあらゆる種類の主題をもっておられたが、その中でも最も力説されたことは聖霊の賜物ということであった。この賜物の故になんと大きなことを彼は教会に対して予言されたことであろう。しかも現在、この主題が力説されていないのは何たることであろう。またこの約束ほど成就されていないものは少ないのだ。聖霊に関してたまに説教され、その主題はあとでよく考えようとして放置される。



#### 終末時代の預言—黙示録の新鮮な解釈

講師：フランクリン・ファウラー医師 3日～7日

先回はダニエル8～12章の終末的適用を研究したが、今回は、その復習と質問。

黙示録の研究。特に7つの封印についての研究をして下さる。

なぜ、イエスが来られるか—その理由。



津嘉山繁牧師のクラス：「救いの喜びとクリスチャンの自由」

# 書籍案内

**NEW**

2008年春季セミナーの収録集

## “黙示録の終末的適用” Dr. ファウラー他

- テキスト 価格: ¥800(税込)
- DVD【23枚】価格: ¥9,200(税込)
- CD【23枚】価格: ¥5,750(税込)
- MP3【DVD-DATA1枚】価格: ¥1,840(税込)



① 救いの喜び(1) 津嘉山繁／② 黙示録の構造—神のみ座を囲む生き物 Dr.ファウラー／③ ダニエル8-12章の復習—質疑応答 Dr.ファウラー／④ 救いの喜び(2) 津嘉山繁／⑤ 7つの封印の巻物 Dr.ファウラー／⑥ 致命的な傷を受けた獣・癒された獣 Dr.ファウラー／⑦ 復習とまとめ 金城重博／⑧ 7つの封印への序論 Dr.ファウラー／⑨ 救いの喜び(3) 津嘉山繁／⑩ 第一の封印—白い馬 第二の封印—赤い馬 Dr.ファウラー／⑪ エキュメニカル運動の進展 Dr.ファウラー／⑫ 救いの喜び(4) 津嘉山繁／⑬ 第三の封印—黒い馬 第四の封印—青白い馬 Dr.ファウラー／⑭ 偉大なる神 Dr.ファウラー／⑮ 復習とまとめ 金城重博・教科研究 津嘉山繁／⑯ 礼拝説教—われらの高き召し Dr.ファウラー／⑰ ダニエル8&9章の誤解と新神学 Dr.ファウラー／⑱ 第五の封印—殉教者の叫び Dr.ファウラー／⑲ 天の都を目指して—音楽プログラム／⑳ 第六の封印—ヤコブの悩み Dr.ファウラー／㉑ 21.70週の『最後の週』終末的適用 Dr.ファウラー／㉒ 144,000—彼らのごとく Dr.ファウラー／㉓ 第七の封印—天に沈黙 Dr.ファウラー



終末時代における  
霊の賜物  
R・F・コットレル&  
エレン・G・ホワイト

価格:100円(税込)



神の聖安息日の遵守  
エレン・G・ホワイト&  
ボブ・マッシューズ  
安息日遵守の意味

価格:100円(税込)



「小さな光」と「大きな光」  
〜証の文と聖書の関係〜  
ローレンス・ネルソン

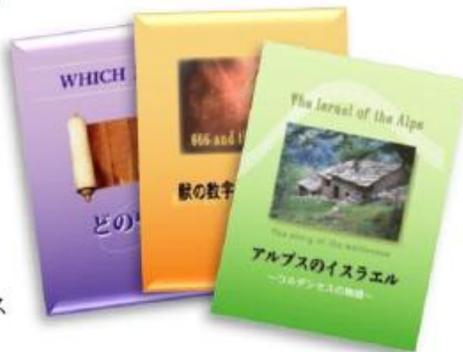
価格:100円(税込)

## LLTプロダクション制作のビデオ DVD版で再発行

■どの聖書? Which bible  
ジョー・マニスカロ

■666 獣の数字とそのしるし  
ジェームズ・アラビート

■アルプスのイスラエル  
真理の保管者、ワルデンセス  
教徒の感動の物語  
各価格:2,000円(税込) 約100分



人類が直面している  
世界情勢  
エレン・G・ホワイト

価格:100円



小石の波紋  
猪川守 体験の証

価格:100円



## サンライズミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村今泊1471

TEL: 0980-56-2783 FAX: 0980-56-2881

Email: [contact@srministry.com](mailto:contact@srministry.com) [www.srministry.com](http://www.srministry.com)

郵便振込番号: 02080-0-12121 サンライズミニストリー

### サンライズ・ミニストリー刊行誌 「アンカー」の目的と編集指針

我々は次のことを信じてアンカーを出版している。

1. 我々SDAの働きと使命は三天使の使命である。(6T 384, 2SM 142)
2. 第三天使の使命は人々をキリスト再臨の栄光の前に立ち得る特別な備えをさせるものである。(9T 98, 大争闘下 140)
3. 第三天使の使命は人々の心を至聖所に向ける。そこにおいて信者は最後の、特別な贖いを受ける。(初代文集 414, 5, 7)
4. 我々は神のご計画されたこの特別な祝福、特別な経験を担い続けてきた。特に1888年以来。(RH 26, 1890年)
5. ダニエル書8: 14の聖句は再臨信仰の土台であり、み業の完成はこの聖句の正しい理解にかかっている。(生き残る人々 422, EV 221, 5T 575)
6. エレン・G・ホワイトは聖書の預言者と同様の靈感が与えられた預言者である。(ISM 36)
7. 最後の時代の嵐に押し流されないようにさせるアンカー(錨)は、三重の使命、聖所、安息日、人の性質、イエスの証(預言の霊)等である。(初代文集417, 1T 300)
8. アンカーはリレーの最終走者の意味もある。この世代は福音の働きが信者の中に、外の世界に完成する最後の時代である。不信仰によって、150年も時が延ばされ、イエスの十字架の苦しみを増している。(大争闘下 182, 教育 328) 信仰による義認の体験によって、再臨を早めることをキリストは待っておられる。再臨とみ業完成をこれほど遅らせているのが我々神の民であるとするならば、我々の今日の、義務は何か、約束のものを受ける条件は何なのかを研究し、共に備えたいと思う。
9. セブンスデー・アドベンチストは最後の「残りの民」である。たとい教会がどんなに背教しようとも、激しい震いの経験をして、純潔な教会となり、永遠の神の目的がこの教会によって達成されると信じている。